

# 小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII

矢田新遺跡  
五郎座貝塚  
松谷廃寺跡

2018.3

石川県小松市埋蔵文化財センター

## 例 言

1. 本書は、石川県小松市において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

### 【矢田新遺跡】(平成 25 年度)

- [調査地] 石川県小松市矢田町  
[調査原因] 個人住宅  
[試掘調査] 2013. 3. 25  
[試掘担当] 岩本信一  
[調査面積] 63m<sup>2</sup>  
[発掘調査] 2013. 7. 9 ~ 2013. 7. 26  
[調査担当] 横幕 真  
[試掘調査] 2013. 7.23 ~ 2013. 7.24  
[試掘担当] 岩本信一  
[調査面積] 65m<sup>2</sup>  
[発掘調査] 2013.10.17 ~ 2013.10.30  
[調査担当] 下濱貴子

### 【五郎座貝塚】(平成 25 年度)

- [調査地] 石川県小松市今町  
[調査原因] 個人住宅  
[試掘調査] 2013. 3.18 / 2013. 4.18  
[試掘担当] 岩本信一、宮田 明  
[調査面積] 58m<sup>2</sup>  
[調査期間] 2013. 5.23 ~ 2013. 6.18  
[調査担当] 宮田 明

### 【松谷廃寺跡】(平成 22 ~ 24 年度)

- [調査地] 石川県小松市五国寺町  
[調査原因] 重要遺跡詳細分布調査  
[調査面積] 約 4.000m<sup>2</sup>  
[調査期間] 2010. 5. 8 ~ 2010. 7. 5  
2011. 8. 3 ~ 2011.11.28  
2012. 7.23 ~ 2012.10.11

- [調査担当] 川畠謙二

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 29 年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、各執筆担当者が行った。
7. 本書の編集は宮田が担当し、各執筆担当者を目次に示した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会で一括保管している。

## 凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高(T.P.)で表示し、世界測地系に準拠している。五郎座貝塚は「測地成果 2011」、ほかは「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録の時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

## 目 次

I 位置と環境 .....	(宮田).....	1
II 矢田新遺跡発掘調査 .....	(横幕).....	13
III 五郎座貝塚発掘調査 .....	(宮田).....	27
IV 松谷廃寺跡確認調査 .....	(宮田).....	39
報告書抄録 .....		48
写真図版 1 ~ 8		

# 第Ⅰ章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

### 1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km<sup>2</sup>を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

### 2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火碎流堆積物よりなるが、この外縁を線取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5～10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全城、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・津上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向を変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突破して日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

### 3 梯川と梯川デルタ

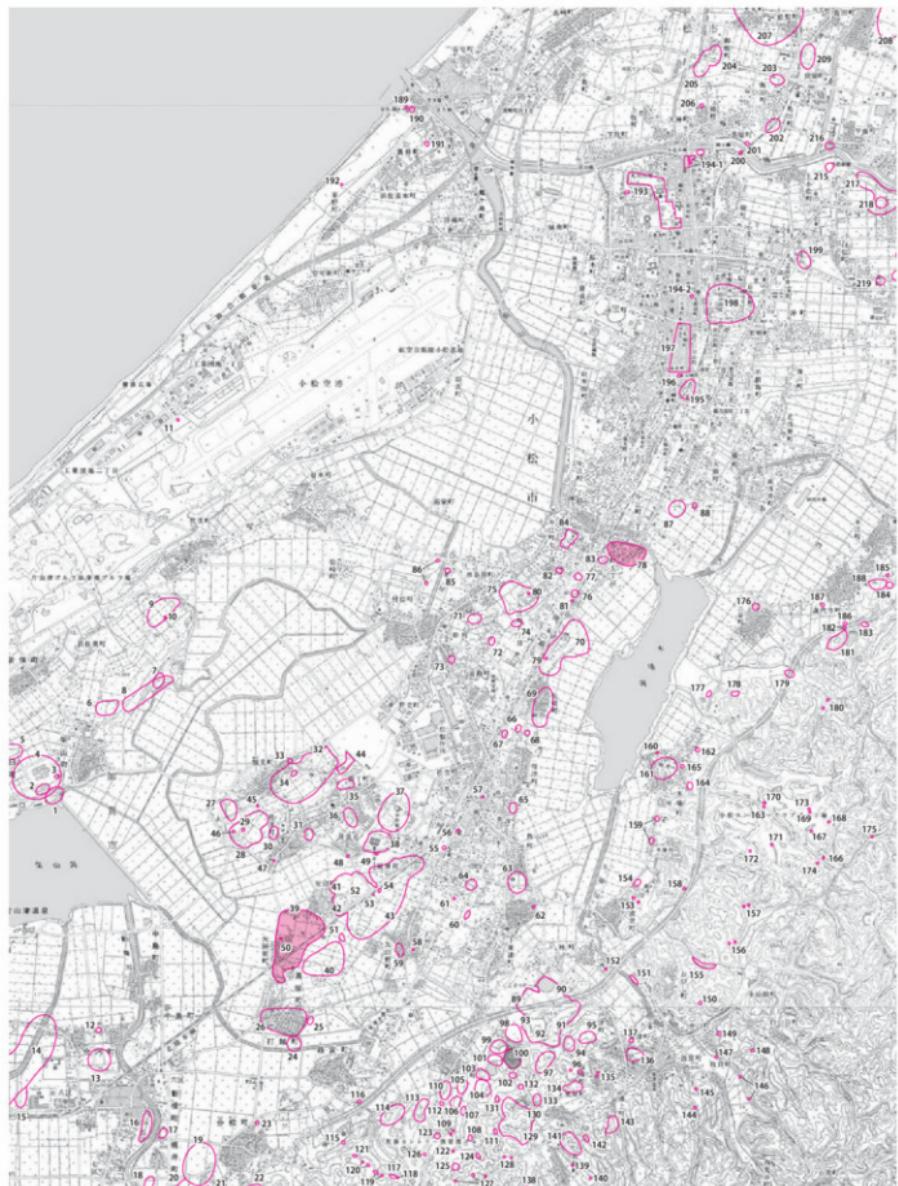
梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な冲積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



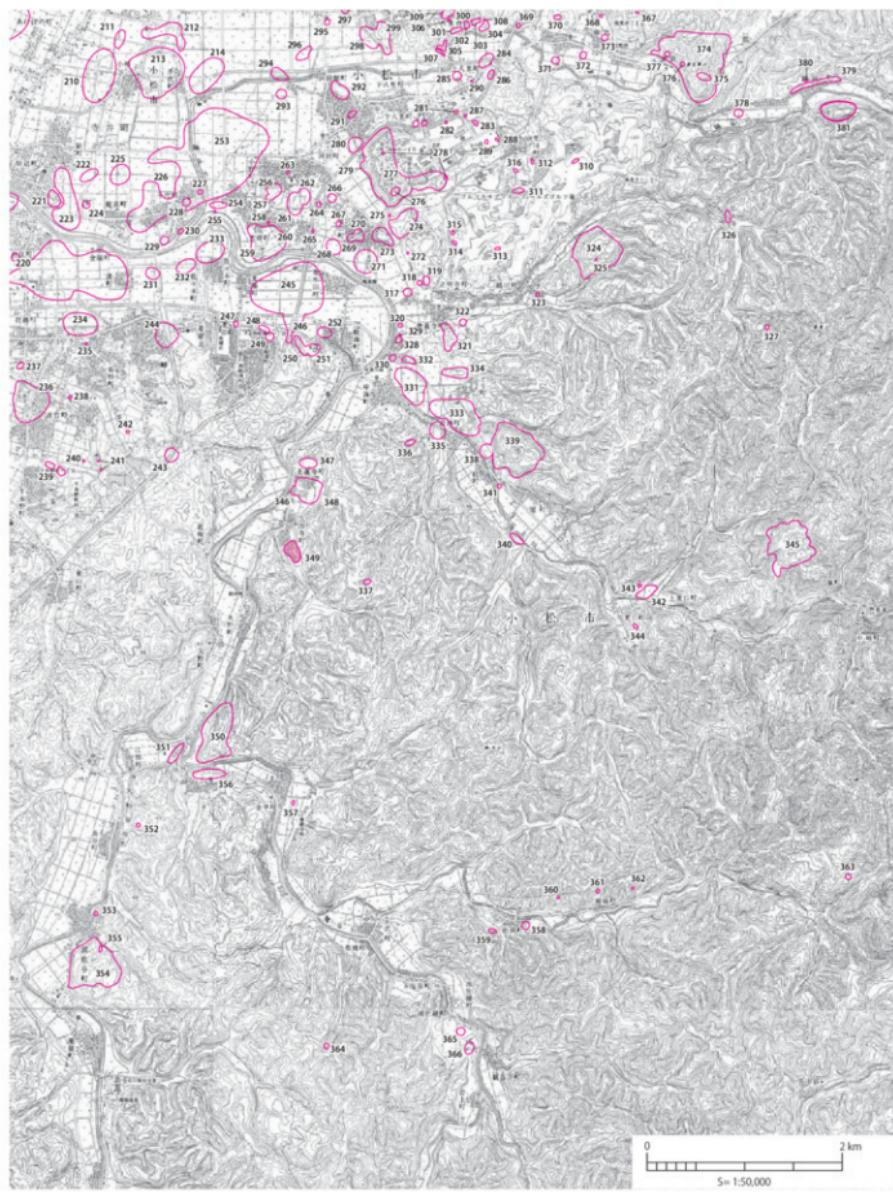
第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事实上、梯川と今江渕・木場渕を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

## 第 2 節 歴史的環境

### 1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少くないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A～F 遺跡（300～305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A～D 遺跡や宮竹うっしょやま A・B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

### 2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

### 3 古 墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代才オキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

#### 4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設えた堅穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書き土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷庵寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、今までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、從前の白江念仏寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、從来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事實を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

#### 5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、壺を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（岡郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

## 6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土佐古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
1	篠山本郷古墳	古墳	縄文	
2	篠山本郷	その他の墓	中世	
3	篠山本郷遺跡	遺布地	不詳	
4	篠山本郷	城跡跡	中世	
5	一ノ入遺跡	遺布地	古墳～古代	
6	篠山本郷	古墳・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
7	篠山本郷遺跡	古墳	古代	
8	篠山本郷遺跡（本郷地）	遺布地	古生	篠山本郷古墳 A 地点に所在する丘陵
9	山の口遺跡	遺跡	縄文	
10	赤坂古墳	古墳	不詳	
11	日本坂古墳	古墳	不詳	
12	弓削遺跡	遺布地	不詳	
13	新堀遺跡	遺布地	古代（平安）	
14	新堀遺跡	遺源跡	古生～中世	
15	新むづき城跡跡跡	遺布地	古代	
16	新堀跡跡	遺堀跡	中世（室町）	
17	楓川衛生センター遺跡	遺布地	古代	
18	楓川遺跡	遺布地	古代	
19	分校 A 遺跡	遺布地	古墳	
20	分校 B 遺跡	遺布地	古代（平安）	
21	分校 C 上古墳跡	古墳	古墳	円墳 2
22	分校 C 下古墳跡	古墳	古墳	前方後円墳 3、円墳 10、方墳 6
23	分校山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	行耕 A 遺跡	遺布地	縄文	
25	行耕 B 遺跡	遺布地	古生	
26	行耕跡跡	城跡跡	中世（室町桃山）	
27	扇貝山古墳跡	遺源跡	古生～中世	
28	扇貝山 A 遺跡	遺布地	不詳	
29	扇貝山 B 遺跡	遺布地	縄文	
30	扇貝山型古墳	その他の（祭祀）	古代（奈良）	

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
30	月津オカの瀬	断面地	古墳・中世	
31	月津人跡跡	断面地	古代（奈良）	
32	貝貝村遺跡	断面地	縄文	
33	貝貝村前日遺跡	断面地	古墳・中世	貝貝村前日遺跡の一箇
34	貝貝村前日遺跡	断面地	縄文	貝貝村前日遺跡の一箇
35	市町遺跡	断面地	縄文・不詳	
36	月津人跡跡	断面地	縄文・古代	
37	佐佐木古墳	集落跡	縄文	
38	佐佐木古墳	集落跡	弥生・古墳	
39	美田原遺跡	集落跡	古代（奈良）	
40	万町遺跡	集落跡	縄文	
41	美田原遺跡	断面地	縄文	
42	美田原遺跡	断面地	古墳	美田原遺跡の一箇
43	美田原遺跡	集落跡	古墳・古代	
44	白の山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門山古墳	古墳	古墳	円墳
46	東山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	興京山古墳	古墳	古墳	円墳
48	佐佐木古墳	古墳	古墳	円墳
49	佐佐木古墳	古墳	古墳	円墳、木立點子型
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、石周輪式石室、室形石室
51	鶴森山古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	佐佐木古墳群	古墳	古墳	PPW 14、前方後円墳 3、木納 1、木立點子型
53	大久保古墳	古墳	古墳	円墳
54	美田原古墳群	古墳	古墳	PPW 3、前方後円墳 1
55	美田原エジノ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	西幡屋山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	西津山古墳	古墳	古墳	円墳、石周輪式石室
58	中村山古墳	古墳	古墳	円墳、石周輪式石室
59	矢田山神社古墳	断面地	古代（平安）	
60	下栗山 A 墓	古墳	不詳	楕円 7 ~ 8
61	鳥狩跡	耕塚	不詳	
62	下栗山 B 墓	古墳	不詳	楕円 2
63	鳥狩跡	集落跡	弥生・中世	
64	鳥 B 遺跡	断面地	古代	
65	鳥 C 遺跡	断面地	古墳	方墳？
66	丹津人跡跡	断面地	縄文	
67	丹津人跡跡	断面地	縄文	
68	丹津人跡跡	集落跡	古墳	
69	美崎の下古墳	集落跡	縄文・中世	
70	裏原跡	集落跡	古墳・古代	
71	東かこノヤマ A 遺跡	断面地	古代（奈良）	
72	東かこノヤマ B 遺跡	断面地	古墳	
73	東かこノヤマ C 遺跡	断面地	古墳	
74	西山の山古墳	断面地	弥生	
75	西山古墳	集落跡	古墳	
76	千百瀬跡	断面地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎山遺跡	遺跡	縄文	
79	美崎の古墳	古墳	古墳	前方後円墳、今中巾折定跡
80	鶴山古墳	古墳	古墳	楕円 4
81	千百瀬跡	古墳	古墳	1丁上山古墳の一箇
82	鶴早野古墳	古墳	古墳	前方後円墳
83	今江四丁目	古墳	古墳	楕円 4
84	鶴早野古墳	断面地	中世	1丁上山古墳の一箇
85	今江四丁目	古墳	中世	圓錐
86	今江三丁目	古墳	近世初期	楕円窓
87	大原遺跡	断面地	古代	
88	丹津人跡跡	その他の遺跡	中世末	軸指向定跡
89	丹津人跡跡	古墳	不詳	
90	林道跡（林タカヤマ古跡跡群）	生産遺跡	古墳	南加賀古跡跡之群
91	林道跡（林タカヤマ古跡跡群）	生産遺跡	古墳	南加賀古跡跡之群
92	林道跡（林タカヤマ古跡跡群）	生産遺跡	古墳	南加賀古跡跡之群
93	丹津人字丘古跡跡群	生産遺跡	古墳	南加賀古跡跡之群
94	丹津人跡跡	生産遺跡	古代（平安）	軸指向
95	丹津クニガタニ古跡跡	生産遺跡	不詳	製陶炉 1、製灰窯 1
96	丹津クニ古跡跡	生産遺跡	古代（平安）	南加賀古跡跡之群
97	丹津アヤマ古跡跡	生産遺跡	不詳	製陶炉 1、製灰窯 3
98	二ツ駒一山古跡跡群	生産遺跡	古代	南加賀古跡跡之群
99	二ツ駒一山古跡跡群	生産遺跡	古墳・古代	南加賀古跡 4
100	二ツ駒一山古跡跡群	生産遺跡	古墳・古代	南加賀古跡 2（南加賀古跡 2）、南加賀古跡跡之群
101	二ツ駒種々古跡跡群	生産遺跡	古墳・古代（平安）	南加賀古跡（南加賀古跡 3）、南加賀古跡跡之群
102	二ツ駒ミキタラ古跡跡群	生産遺跡	古代	土師器 4、土器
103	二ツ駒丸山古跡跡群	生産遺跡	古墳	南加賀古跡 3、南加賀古跡跡之群
104	二ツ駒丸山古跡跡群	生産遺跡	古墳	南加賀古跡 3、南加賀古跡跡之群
105	二ツ駒丸山古跡跡群	生産遺跡	古墳	南加賀古跡 5、南加賀古跡跡之群
106	二ツ駒金剛跡	生産遺跡	古代（奈良）	南加賀古跡 1、製陶炉 1、南加賀古跡跡之群
107	二ツ駒川跡	生産遺跡	古代（奈良）	南加賀古跡 1、製陶炉 1、南加賀古跡跡之群

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
108	ノゾモ井山古墳群	生産遺跡	古代(平安末)	近世以前 2. 加賀第 1. 湖北西古窯跡群
109	船岡古墳 1~2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
110	ノゾモ井山古墳群	生産遺跡	古代	近世以前 3. (古窯跡群) 1. 湖北西古窯跡群
111	ノゾモカニガニ古窯跡群	生産遺跡	不詳	近世以前 3. 湖北西古窯跡群
112	美田野古墳山古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	近世以前 6. 湖北西古窯跡群
113	美田野古墳山古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)・中世(縄文)	近世以前 6. 加賀第 2. 湖北西古窯跡群
114	越前川ウガクチ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(縄文)	近世以前 6. 加賀第 2. 湖北西古窯跡群
115	越前川 A 窯跡	窯跡地	中世	
116	越前川 B 窯跡	窯跡地	中世	
117	小天王谷 1~2号窯跡	生産遺跡	中世(縄文)	加賀第 2
118	小天王谷 1号製鉄跡 (天王山 1号製鉄跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷 2~3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
120	大久保塚 1~2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
121	大久保塚古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	黒谷 1号窯跡	生産遺跡	中世(縄文)	加賀第
123	美田野カニガニサザニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 3
124	美田野 1~2号窯穴	窯穴墓	不詳	
125	黒谷 1~5号窯穴	窯穴墓	不詳	
126	黒谷 6号窯穴	窯穴墓	不詳	
127	黒谷6号古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 3
128	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
129	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	近世以前 3. 製鉄 3. 湖北西古窯跡群
130	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	近世以前 4~5. 製鉄 2. 燭台 1. 地下式坑 1. 湖北西古窯跡群
131	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	古墳・古代(奈良)	近世以前 4. 湖北西古窯跡群
132	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	古代	近世以前 2. 湖北西古窯跡群
133	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	古代(奈良)・中世(縄文)	近世以前 1. 加賀第 1. 製鉄炉 1. 湖北西古窯跡群
134	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	中世(縄文)	加賀第 4. 製鉄炉 1
135	河津 1~2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
136	河津 3号古窯跡	技術炉	中世(縄文)	
137	河津 4号古窯跡	窯跡地	古代(中世)	
138	「黒谷6号」古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1
139	赤堀 1号古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	近世以前 1. 製鉄炉 1. 湖北西古窯跡群
140	赤堀 2号古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1
141	「赤堀2号」古窯跡	生産遺跡	古墳(平安)~中世	近世以前 1. 製鉄炉 2. 燭台 1. 湖北西古窯跡群
142	「赤堀2号」古窯跡	生産遺跡	中世(縄文)	加賀第 2
143	月山古窯跡群	生産遺跡	中世(縄文)	加賀第 10. 製鉄炉 2
144	赤原トカラシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	赤原トカラシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
146	坂口 1号古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
147	坂口 2号古窯跡	遺風	中世(縄文)	収拾毎定期
148	日向川 1号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
149	日向川製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	月山 1号古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	月山 1号窯跡	窯跡地	不詳	
152	林八幡神社古窯跡	縄文	中世(縄文)	
153	津賀島ホルトジ窯跡	窯穴墓	中世(室町末)	地下式坑 6. 2基調査
154	大谷 1号古窯跡	縄文		
155	小山田コガナリ古窯跡	窯跡地	不詳	湖北西古窯跡
156	小山田コガナリ古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
157	小山田オタタニ古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
158	津賀島ハラタニ古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1. 製鉄業者
159	木場山古窯跡	古墳	古墳	丹波 4
160	木場山古窯跡	古墳	古墳	埋示で出土品は記載されない
161	木場山古窯跡	窯跡地	不詳	
162	木場山古窯跡	縄文		
163	木場山古窯跡 (木場山窯跡群 D)	生産遺跡	古代(奈良)	製鉄炉 1. 製鉄業 2
164	木場山古窯跡	縄文		
165	木場山古窯跡	縄文		
166	木場山窯跡 A 基盤 (1号窯跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄業 3. 氷津郡古窯跡
167	木場山窯跡 B 基盤 (2号窯跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉 3. 製鉄業 3
168	木場山窯跡 C 基盤 (3号窯跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
169	木場山窯跡 D 基盤 (4号窯跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1. 製鉄業 1
170	木場山窯跡 E 基盤 (5号窯跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場山窯跡 F 基盤 (6号窯跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
172	木場山窯跡 G 基盤 (7号窯跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場山窯跡 D 基盤 (8号窯跡)	窯穴墓	不詳	坂口 1
174	大高遺跡	窯跡地	不詳	湖北西古窯跡
175	長谷川遺跡の小窯跡	窯跡地	不詳	湖北西古窯跡
176	「古窯跡」	窯跡地	縄文	
177	「古窯跡」	窯跡地	弥生~古墳	
178	「古」古窯跡	不詳	不詳	遺在又は疑
179	「古」古窯跡	窯跡地	古代~中世	
180	「古」古窯跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1. 氷津郡古窯跡
181	蓬台山窯跡	城跡	不詳	小堀村の鶴ヶ
182	蓬代カニガニ古窯跡	生産遺跡	中世(縄文)	製鉄炉 1. 製鉄業 1
183	蓬代カニガニ古窓跡	生産遺跡	古墳	製鉄業 3. 氷津郡古窯跡
184	蓬代 A 窯跡	窯跡地	不詳	氷津郡古窯跡
185	木口 1号窯跡	生産遺跡	近世	製鉄
186	蓬代 A 窯跡	生産遺跡	近世末	西高九谷「蓬代寺領」
187	蓬代 A 窯跡	生産遺跡	近世前期	機械業
188	蓬代 A 窯跡	技術炉	中世	近代以来現存「蓬代寺」比定地
189	安宅遺跡	その他	不詳	船越指定史跡
190	安宅古窯跡	窯跡地	不詳	
191	安宅古窯跡	その他の遺	中世(室町)	
192	安宅古窯跡	不詳	不詳	磐石陣とも現存の磐石とも。現存せず
193	小松窯跡	窯跡地	近世	本丸 1~2丸。その他の遺。本丸焼物は小松市指定史跡
194	大川窯跡	窯跡地	近世	近代小松城下。支店の現存跡。

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
194-2	東町 通跡	集落跡	近世	近世小北城下町・東町・西尾町
195	京町 通跡	生産地帯	中世（室町）	範地
196	大太郎日向山通跡	踏跡地	中世（室町）	福山市に分離された大太郎日向山
197	木村脚跡	踏跡地	中世	木村氏が脚跡し承地の一
198	八日山地方遺跡	踏跡地	弥生・中世	福山市
199	上小川通跡	踏跡地	古墳（平安）	福地集落
200	福山市城跡跡	踏跡地	弥生	福山市に分離された丸石御城跡地
201	福山市城山通跡	踏跡地	弥生	福山市に分離された丸石御城跡地
202	島田 A 通跡	踏跡地	古墳・古代	古墳・古代
203	島田 B 通跡	踏跡地	古墳	古墳
204	御前通跡	踏跡地	中世（室町）	御前
205	御前通跡	踏跡地	弥生・古代	一内一役・松川新し御前御前に承地
206	福道跡	踏跡地	弥生・古代	福道
207	松原通跡	踏跡地	國文・弥生・中世	國文・古墳・古代
208	長田通跡	踏跡地	古墳	古墳・古墳
209	長田山通跡	踏跡地	弥生・古墳・（平安）	弥生・古墳・（平安）
210	美民野 A 通跡	踏跡地	弥生・中世	美民野
211	美民野 B 通跡	踏跡地	不詳	不詳
212	牛馬山907m通跡	踏跡地	古代（平安）	牛馬山
213	牛馬山1200m通跡	踏跡地	弥生・中世	牛馬山
214	牛馬山1300m通跡	踏跡地	國文・中世	國文
215	牛馬山1400m通跡	踏跡地	古墳	古墳
216	牛馬山900m通跡	踏跡地	弥生	福山市に分離された牛馬山御城跡地
217	牛馬山1500m通跡	踏跡地	弥生	福山市に分離された牛馬山御城跡地
218	GII-9999	城跡跡	中世（室町）	GII-9999御城跡地の事
219	GII-9999	踏跡地	古墳・中世	GII-9999の一部
220	通町通跡	踏跡地	弥生・中世	通町
221	一針通跡	踏跡地	國文	國文
222	一針山通跡	踏跡地	弥生・古墳	弥生・古墳
223	一針山通跡	踏跡地	弥生・古墳	弥生・古墳
224	安地通跡	片今跡	中世（室町）	中世
225	千代・蓬莱通跡	踏跡地	古墳・中世	古墳・中世
226	千代オオクダ通跡	踏跡地	國文・弥生	國文・弥生
227	千代オオクダ通跡	踏跡地	古墳	古墳
228	千代通跡	城跡跡	中世（室町）	方墳 6
229	千代木本通跡	踏跡地	古墳	方墳 6
230	破地通跡	踏跡地	國文	國文
231	佐々木通跡	踏跡地	古墳	時代城毛跡（奈良）
232	佐々木ナツウラ通跡	踏跡地	弥生・中世	佐々木ナツウラ
233	佐々木アサハタケ通跡	踏跡地	弥生・中世	弥生・中世
234	行経通跡	踏跡地	古墳	古墳
235	若村通跡	生産地帯	近世末	西岡九谷「若村業」・通院式登案
236	吉竹通跡	踏跡地	弥生・中世	吉竹
237	吉竹山通跡（吉竹通跡 19 番区）	踏跡地	古墳	110番の解説
238	吉竹山通跡	踏跡地	弥生・中世	吉竹
239	木本山通跡	踏跡地	國文	國文
240	木本山（a）通跡	踏跡地	古墳	古墳
241	木本山（b）通跡	踏跡地	古墳	古墳
242	若行山通跡・若谷 2 号通跡	古墳	古墳	所不詳、現存するには現代残土のみ
243	若村山（a）通跡	生産地帯	古墳	古墳
244	若水寺跡	古跡	古代・中世	若水寺跡
245	八幡通跡	踏跡地	生産・古墳・古跡（奈良）・中世（國文）	八幡
246	八幡山の里の通跡	踏跡地	古墳	古墳
247	大沢山通跡	踏跡地	古墳	古墳
248	朝尚通跡	踏跡地	古墳	古墳
249	龜山通跡	踏跡地	古墳	古墳
250	軒向山日景台	生産地帯	古墳	玉作
251	軒向山日景台	その他の墓	中世（室町）	集石墓 9
252	西の方ヶ通跡	片今跡	古墳（平安）	大内寺山承地
253	吉川山のまも通跡	踏跡地	古墳（平安）	西の方ヶ通地
254	吉川山通跡	踏跡地	弥生・古墳	國文・中世
255	吉川アシント通跡	踏跡地	古墳（平安）	古墳
256	十九日山通跡	片今跡	古墳（平安）	加賀国守方郡元町
257	十九日山中世邑聚	その他の墓	中世（室町）	中世
258	古村町	不詳	不詳	不詳
259	古村 A 通跡	踏跡地	古代（平安）～中世	古代（平安）～中世
260	南野山通跡	踏跡地	國文	國文
261	小野通跡	踏跡地	古代（平安）	加賀国守定地の一
262	小野 A ゴノ通跡	踏跡地	古代（平安）	加賀国守定地の一
263	小野通跡	生産地帯	近世末	西岡九谷「小野業」
264	細田山雲見坂	その他の墓	近世	細田利常が夢に見付かれた地とされる
265	細田山表塚	その他の墓	近世末	大山の表塚供奉と祭祀方法を記した行方・小松山御定地
266	細田山ヤマノ通跡	踏跡地	不詳	不詳

No	名 称	種 别	時 代	備 考
267	鍋田山サンゴ遺跡	遺跡地	古墳	
268	鍋田山A遺跡	遺跡地	古代・中世	
269	鍋田山C遺跡	遺跡地	古墳	
270	芦谷ラ尾敷遺跡	遺跡地	鐵文・中世(奈良)	
271	鍋田山遺跡	遺跡地	古代	
272	鍋田塚	不詳	不詳	
273	鍋田山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木柏山群、木芯粘土層
274	鍋田山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
275	鍋井坂古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	遺跡地	別石郡・鍋文	
	集落跡	共生		高地性集落、河田山10～12号墳が牽属
	その他の墓	古代(奈良)		火葬墓、河田山1号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後方墳2、前方後方墳2、円墳22、方墳34、不明1、木柏山群
	河田山穴	掘六墓	不詳	地下式穴、河田山154号墳の南に開口
278	河田山1号墳群	生産遺跡	古代(奈良)	圓原遺跡、能美古20號古墳、八里・河田山支群、河田山60号墳の北側斜面に所在
	河田山古墳群	生産遺跡	不詳	圓原遺跡、能美古20號古墳、八里・河田山支群
279	河田山遺跡	遺跡地	鍋文・古代(奈良)	
280	河田山遺跡	遺跡地	不詳	
281	下八幡山古墳	掘六墓	不詳	地下式穴6、掘穴1、不明1、3地點で計8基
282	六場崎古墳	掘六墓	不詳	鍋文2基
283	上八幡山古墳	掘六墓	中世(室町)	鍋文11基
284	上八幡山古墳群	その他の墓	中世(室町)	
285	上八幡A遺跡	遺跡地	鍋文・古代(平安)	
286	上八幡B遺跡	遺跡地	古代(奈良)	
287	上八幡C遺跡	掘六墓	古墳	鍋文2基
288	上八幡D遺跡	遺跡地	古代(奈良)	
289	上八幡E遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	圓原遺跡、能美古20號古墳、八里・河田山支群
290	上八幡F2号墳群	生産遺跡	古代(奈良)	圓原遺跡、能美古20號古墳、八里・河田山支群
291	下八幡山遺跡	不詳	不詳	
292	下八幡山遺跡	遺跡地	鍋文・中世	
293	下八幡山遺跡	遺跡地	不詳	
294	近野A遺跡	遺跡地	共生	
295	近野B遺跡	遺跡地	古墳	
296	近野・山田遺跡	遺跡地	古墳	
297	近野・山田遺跡	遺跡地	古代(平安)	
298	河田山山下遺跡	遺跡地	鍋文・古代(平安)	
299	河田山山古墳群	古墳	古墳	円墳7
300	八里山山A遺跡	遺跡地	鍋文	
	集落跡	共生		高地性集落
301	八里山山B遺跡	遺跡地	別石郡・鍋文	
	社寺跡	古代(奈良)		加賀800年・國分寺跡(山林)今残存の一つ
302	八里山山C遺跡	遺跡地	別石郡・鍋文・古代(奈良)	
	集落跡	共生		
	古墳	古墳		前方後方墳1、木柏山群
303	八里山山D遺跡	遺跡地	別石郡・鍋文	
	集落跡	共生～古墳		
304	八里山山E遺跡	遺跡地	古墳	方墳2、木柏山群
	集落跡	古墳		
305	八里山山F遺跡	古墳	古墳	方墳1
	その他の墓	掘六墓	中世(室町)	集落墓1、鍋文3
306	八里山山G遺跡	遺跡地	共生・古代(平安)	
307	八里山山H遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)	集石墓群、96号墳調査
308	八里山山I遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	高地性集落、能美古20號古墳、八里・宝引支群
309	八里山山J遺跡	生産遺跡	古墳	高地性集落、能美古20號古墳、八里・宝引支群
310	聖川山A遺跡	生産遺跡	不詳	別石郡2、2000年約20
311	聖川山B遺跡	生産遺跡	不詳	別石郡
312	聖川山C遺跡	生産遺跡	不詳	別石郡
313	聖川山D遺跡	遺跡地	鍋文	
314	聖川山E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀800年・國分寺跡(山林)今残存の一つ
315	聖川山F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀800年・國分寺跡(山林)今残存の一つ
316	聖川山G遺跡	遺跡地	不詳	
317	道楽タカシタA遺跡	遺跡地	古代(平安)～中世	
318	道楽タカシタB遺跡	遺跡地	古代(平安)～中世	社寺(瑞應寺)又は城郭化事地、
	生産跡	古代(平安)		高地性集落(丘陵地帯)
319	小明の古墳群	古墳	古墳	古代遺跡の可能性も
	御町の古墳	古墳	古墳	少貴八開、指物あら伝来物の一つ
320	聖堂寺遺跡	遺跡地	鍋文	
321	内の遺跡遺跡	その他の墓	(平安)	遺跡4、3基調査、2号墳は鍛冶時代に鍛炉に利用された?
322	通渠寺跡	社寺跡	古代(平安)	小字八開、指物ある伝來物の一つ
323	通渠寺跡	社寺跡	中世(室町)	一門一・宇川流域の伝来物とともに
324	鶴川寺跡	城跡跡	不詳	一門一・宇川流域の伝来物とともに
325	鶴川山穴	不詳	不詳	地下式穴
326	弘大山山A遺跡	社寺跡	中世	
327	弘大山山B遺跡	古墳	古墳	
328	弘大山山C遺跡	社寺跡	中世	
329	弘大山山D遺跡	耕塚	中世	
330	ブンショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2、木芯粘土層
331	中海A遺跡	集落跡	古墳・中世	
	(古) 長谷寺跡	社寺跡	古代(平安)	中字八開、地名伝承のみ
332	中海B遺跡	遺跡地	古代(平安)～中世	
	中海C遺跡・岩田遺跡	遺跡地	鍋文	
333	岩田A・野瀬跡	遺跡地	旧石器	

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
334	赤坂手付跡	その他の墓	中世	
335	赤坂山古墳跡	踏布地	縄文	
336	赤の谷古墳之群	不詳	不詳	存在自体が不詳、5基間に辯される
337	赤幡古ダギノキ古墳之群	被穴墓	不詳	横穴式、地下式浜4
338	黄岡手付跡	丘古跡	古代(平安)	小笠山御定史跡
339	羽根跡跡	城跡跡	中世	
340	乞ト田跡跡	城跡跡	中世	
341	乞跡の古跡跡・仏跡面壁	その他の墓	古代(平安)	小松市御定史跡
342	吉ノ山跡跡	踏布地	縄文	
343	吉ノ山世観跡	その他の墓	中世	
344	下支ノ山古墳	被穴墓	不詳	横穴3
345	羽音跡跡	城跡跡	中世(室町)	
346	鳴の木古道跡	踏布地	縄文	
347	鳥越今井跡	丘古跡	不詳	中内八戻
348	通川今井跡	丘古跡	古代(平安)	中内八戻
349	松谷寺跡 松谷寺跡	社寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に遡る古代山林寺跡
		社寺跡	不詳	中内八戻
350	平野今井跡	城跡跡	中世(室町)	一前一後・平野足高城に承襲
351	江尻跡跡(山神山古跡)	城跡跡	中世(室町)	
352	蓮花山跡	丘古跡	不詳	中内八戻
353	渡佐石門跡	踏布地	中世(室町)	
354	渡佐今井跡 (山) 渡佐谷相合寺跡	城跡跡	中世(室町)	一前一後・宇摩六門渡佐古城伝承地
355	渡佐今井跡	被穴墓	不詳	横穴13、地下式浜5
356	東山跡跡	踏布地	縄文	
357	東山古跡跡	踏布地	縄文	
358	東山跡跡	踏布地	縄文	
359	大竹今井跡	被穴墓	不詳	横穴3
360	こか・小竹今井	被穴墓	不詳	横穴1
361	云山跡跡	踏布地	不詳	横穴1
362	透城跡跡	城壁	中世(室町)	
363	筑山城跡	被穴墓	不詳	横穴1
364	赤堀跡跡	踏布地	縄文	
365	今ノ堀跡跡	踏布地	縄文	ほかに今堀跡の伝承あり
366	御百ノ城跡	城跡跡	不詳	
367	和泉守山古跡跡	生産遺跡	古代(平安)	十郎の跡地伝承、能美立洞跡・篠山行太郎
368	和泉守山行2号跡跡	生産遺跡	古代(奈良～平安)	前堀跡伝承、能美立洞跡・篠山行太郎
369	和泉守・和気古跡跡	生産遺跡	古代(平安)	前堀跡伝承、能美立洞跡・篠山行太郎
370	和氣古跡跡	生産遺跡	近世	
371	和気弘1A古跡跡	踏布地	縄文	
372	和気弘1B古跡跡	城跡跡	不詳	
373	和気弘1C古跡跡	生産遺跡	不詳	前堀跡伝承、能美立洞跡・篠山行太郎
374	道守城跡跡	城跡跡	中世	
375	道守城跡跡	被穴墓	不詳	
376	当古今井跡跡	生産遺跡	不詳	前堀跡伝承、能美立洞跡・篠山行太郎
377	当古跡跡	古墳	古墳	
378	綱谷今井跡	丘古跡	不詳	
379	綱谷今井跡跡	その他の墓	中世	
380	綱谷今井跡	被穴墓	不詳	
381	綱谷空跡	城跡跡	不詳	

## 参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992)石川県遺跡図録
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986)漆町遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)漆町遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)辰口西部遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)白江桿川遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡III,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡IV,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)白江桿川遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)蓬代寺地区遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990)小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993)能美丘陵東遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995)石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997)能美丘陵東遺跡群II,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998)能美丘陵東遺跡群III,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群IV,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群V,石川県能美市

- (財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西古窯跡, 石川県能美市
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
- 石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
- ウ 上野 與一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 輕海用水誌編纂委員会 (1996) 輕海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77, p201-221, 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県  
小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県  
小松市教育委員会 (1990) 二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県  
小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県  
小松市教育委員会 (2000) 矢田僧屋古墳群, 石川県  
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県  
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県  
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県  
小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. 二ツ梨豆岡向山窯跡, 石川県  
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田僧屋古墳群, 石川県  
小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県  
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県  
小松市教育委員会 (2006) 頼見町遺跡 I, 石川県  
小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県  
小松市教育委員会 (2007) 頼見町遺跡 II, 石川県  
小松市教育委員会 (2008) 頼見町遺跡 III, 石川県  
小松市教育委員会 (2009) 頼見町遺跡 IV, 石川県  
小松市教育委員会 (2010) 頼見町遺跡 V, 石川県  
小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡 V 次, 石川県  
小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県  
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県  
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市  
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市  
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市  
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市  
辰口町教育委員会 (2005) 和氣後山谷窯跡群, 石川県能美市  
寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 古美郡役所, p366-375, p642, p823, p1268-1269, p1342-1343., 石川県  
日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 编 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

## 第Ⅱ章 矢田新遺跡発掘調査

### 第1節 調査の概要

今報告は、平成 25 年度に小松市矢田町地内（矢田新遺跡）で計画された個人の宅地造成工事に伴う 2 件の発掘調査報告である。

#### 1 調査に至る経緯

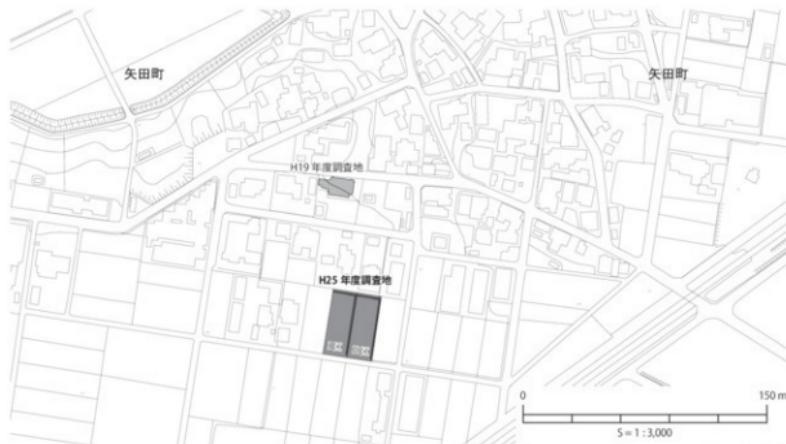
##### (1) H25 調査 I 区

平成 25 年 3 月 13 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは 3 月 18 日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査を 3 月 25 日に実施した。試掘坑から遺構と遺物を確認し、翌 26 日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。協議の結果、擁壁工事範囲 63m<sup>2</sup>において発掘調査による記録保存が必要である旨を回答し、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届の提出を受け、7 月 1 日付けで発掘調査が依頼された。併せて協定書を交換し、発掘調査に着手した。

なお、住宅工事範囲については柱状地盤改良工事が計画され、建物面積における改良範囲の平面積等を検討した結果、埋蔵文化財への影響が軽微であるとの判断に至り、工事立会での対応とした。

##### (2) H25 調査 II 区

平成 25 年 7 月 12 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査は 7 月 23 日～24 日に実施した。試掘坑から遺構と遺物を確認し、8 月 1 日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。協議の結果、擁壁工事範囲 65m<sup>2</sup>において発掘調査による記録保存が必要である旨を回答し、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届の提出を受け、10 月 1 日付けで発掘調査が依頼された。併せて協定書を交換し、発掘調査に着手した。



第4図 矢田新遺跡 調査位置図



第5図 矢田新遺跡 平面図

なお、住宅工事範囲については柱状地盤改良工事が計画され、建物面積における改良範囲の平面積等を検討した結果、埋蔵文化財への影響が軽微であるとの判断に至り、工事立会での対応とした。また、住宅新築に伴う付帯工事の内、浄化槽設置工事の掘削範囲についても埋蔵文化財に影響を与えるものと判断されたが、狭小範囲であったため工事立会による対応とした。

## 2 既往の調査

遺跡は昭和 45 年に発見され、同年発掘調査された。正確な調査地は不明だが、矢田新町付近で、古代Ⅲ～Ⅳ<sub>1</sub>期の遺構や遺物が検出されている（市博 1971）。

平成 19 年には個人住宅を原因とする発掘調査が行われた。掘立柱建物 7 棟・土坑 8 基・溝 8 条・被熱面 2 面が検出され、TK10 形式～古代VI<sub>1</sub>期の遺物が出土している（市教委 2011）。

## 3 調査の方法

調査は隣地境界杭を原点として、グリッド設定や区割り等を行った。平面図及びセクションポイントは、4 級基準点測量及び 3 級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標を用いて、必要に応じて 50 分の 1、40 分の 1、20 分の 1 に図化した。

## 4 調査の経過

### (1) H25 調査 I 区

7 月 9 日、重機で表土除去を開始し、順次、人力掘削を進めた。7 月 11 日より遺構精査を行い、7 月 12 日と 13 日に遺構検出状況の写真を撮影した。7 月 16 日、遺構の掘削を開始し、必要に応じて写真撮影及びセクション図作成を行った。7 月 18 日、併行して平面図作成を開始。7 月 26 日、全ての作業が完了した。

### (2) H25 調査 II 区

10 月 17 日、重機で表土除去を開始し、10 月 18 日より人力掘削と遺構精査を進めた。10 月 21 日、遺構掘削を開始し、必要に応じて写真撮影及びセクション図作成を行った。10 月 28 日、平面図作成を開始。10 月 30 日、全ての作業が完了した。

## 第 2 節 発見された遺構

以下、検出された遺構について述べる。遺構番号の記述は、建物に限り平成 19 年度調査からの通し番号を用いた。また溝や土坑等も整理する中で新しい番号を割り振った。そのため、齟齬のないように現場で付した番号も「[ ]」内に併記した。

### 1 掘立柱建物（第 6 図）

#### SB08 [I 区 P10 / P13 / P17 / (P22)]

検出できた範囲が狭く、桁梁が判別できない柱建ち建物。少なくとも規模は 2 間 × 1 間以上で、柱間は P10～P13 間、及び P13～P17 間でほぼ同じ約 2.3m となる。P10 で柱痕跡や硬化面が明瞭であったほか、P13 と P17 で硬化面を確認した。P22 でも硬化面を確認したが、柱配列からややずれる。主軸方位は不明だが、平成 19 年度調査区で検出された掘立柱建物 7 棟のうち 5 棟が桁行で東に振られるため、同様の主軸をもつ可能性がある。SK02 は位置関係から付属施設であるかもしれない。遺物は、P13 から須恵器片 1 点が出土した。

#### SB09 [II 区 SB01 P1 / P2 / P3 / P4]

SB08 同様、検出できた範囲が狭く、桁梁が判別できない柱建ち建物。少なくとも規模は 2 間 × 2 間以上で、柱間は 1.3～2.1m とバラつく。ほぼ全ての柱穴で硬化面を確認した。主軸方位は SB08 の項を参照すれば、桁行が東西に向く。遺物は、P1～P3 でわずかに土師器片・須恵器片が出土した。

## 2 不明遺構（第7図）

### SX01 [I区 SX01]

I区南端で現地表面から2m以上の落ち込みを検出した。1～3層は明らかに新しい整地層であるが、下層は後述するSDO1と同一遺構の可能性もあるため、単なる搅乱ではないと判断した。遺物は多量の土師器片・須恵器片・鍛冶関連遺物・鉄製品とともに、近世陶磁器片や赤瓦片が混在することからも、下層の遺構が人為的に埋め戻されたと考えられる。図化遺物はNo.3・15・17・34・40・41。

### SX02・SX03 [I区 SX04・SX03]

図示していないが、下底面が被熱して覆土に焼土や炭化物、焼骨片を含む。出土遺物は細片が多く、上面近くで出土する傾向にあった。図化遺物はNo.2・9。

## 3 溝（第7図）

### SD01 [II区 SD01]

II区南端付近で検出された、幅が地山検出面で約1.3m、深さが地山検出面から約88cm、断面U字形を呈する溝。遺物は出土していない。位置関係からSX01と接続する可能性がある。

### SD02 [II区 SD02]

幅が地山検出面で約72cm、深さが地山検出面から約52cmの溝。遺物は少量の土師器片が出土した。

### SD03・SD04 [I区 SD03・SD04]

遺物を多く含むが、覆土は砂質の客土層のため、後世の整地に伴うものと判断した。図化遺物はNo.4・20。

## 4 土坑（第8・9図）

### SK01 [I区 SK05]

部分的な検出のため判断できなかったが、角の張る平面形でしっかりと掘り方と平坦な下底面をもつことから、竪穴建物であるかもしれない。深さは地山検出面から約32cm。上面はSX01に切られている。遺物は土師器・須恵器の細片が出土した。

### SK02 [I区 SK02]

平面形は円形もしくは楕円形と推測され、深さは地山検出面から約20cm。遺物は土師器片・須恵器片・鍛冶滓が出土した。図化遺物はNo.5・8・16で、これらは概ね8世紀代に収まる。

### SK03 [I区 SK02]

南北3.0～3.3m、東西1.9m以上の深い掘り方と、その中央寄りに焼土や炭化物を含むピット群からなる焼上遺構を検出した。主柱穴や壁溝となりうる遺構が検出されなかつたため土坑としたが、竪穴建物に関連する掘り方土坑の一種かもしれない。遺物は土師器片・須恵器片・鍛冶滓が出土した。図化遺物はNo.18・19。

### SK04 [I区 SK03]

調査区内での検出部分はわずかで、深さは地山検出面から約20cm。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。図化遺物はNo.1。

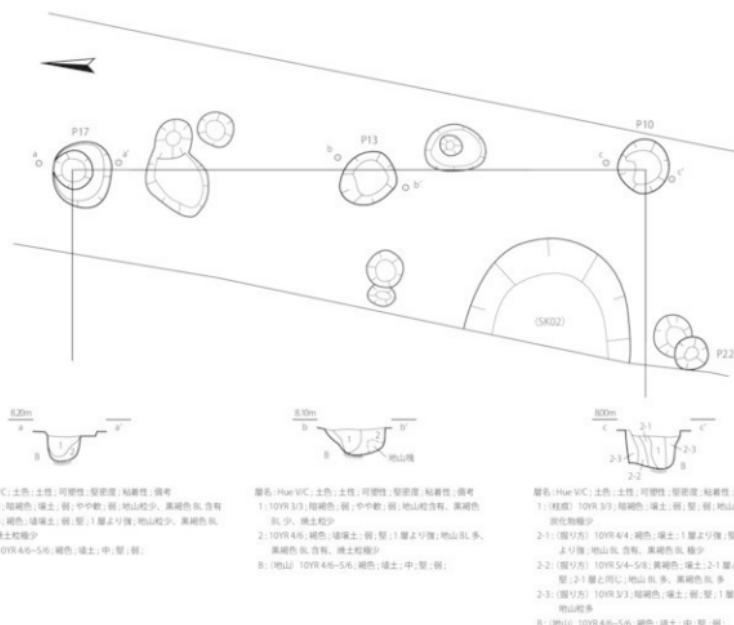
### SK05 [I区 SK04]

部分的ではあるが平面形は不整円形で、深さは地山検出面から最大約36cm。底面は平坦に近い。遺物は土師器片がわずかに出土した。

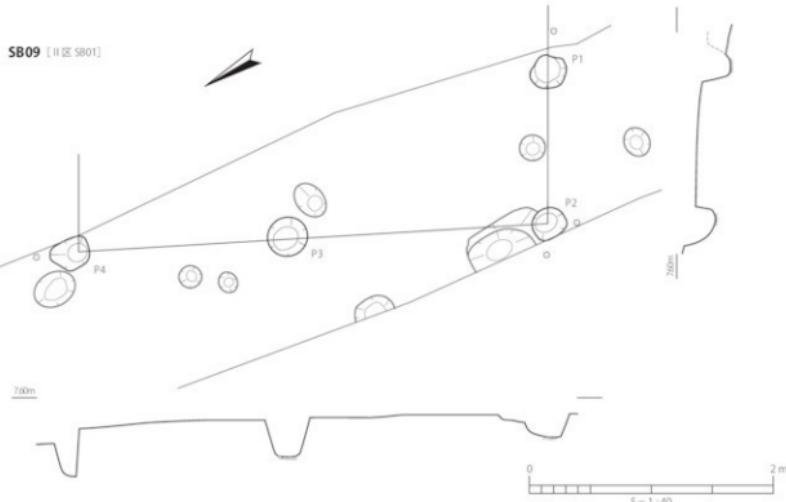
### SK06・SK07 [II区 SK(SI)01・SK(SI)01A]

2基の平面不整円形の土坑で、深さはいずれも地山検出面から約55cm。上層で硬化面を確認し、特にSK06側に顕著であった。面を形成する3層には遺物や焼土、炭化物が多く含まれる。竪穴建物

SB08 [I区 P10・P13・P17・(P22)]

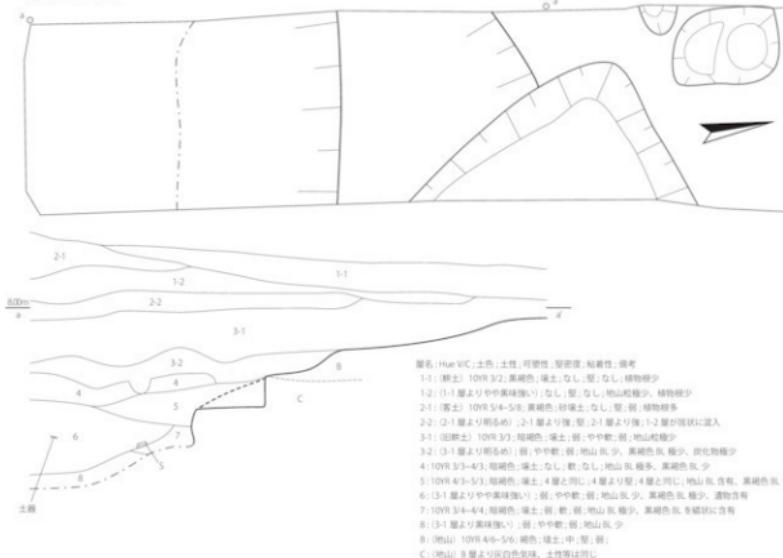


SB09 [II区 SB01]

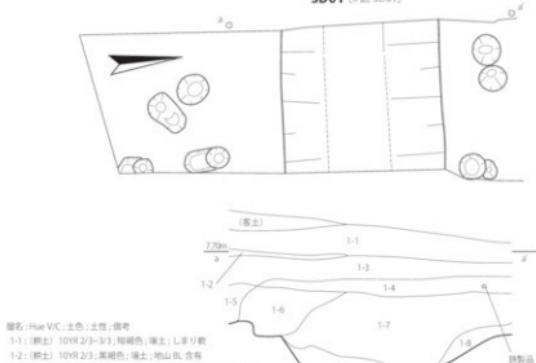


第6図 矢田新遺跡 遺構実測図 1

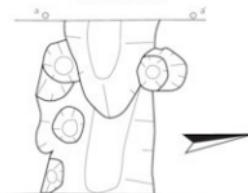
SX01 [I 区 SX01]



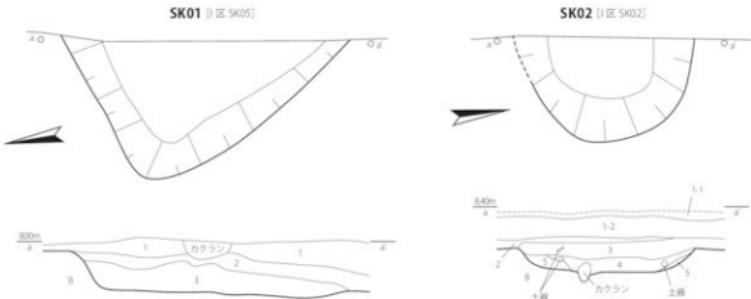
SD01 [II 区 SD01]



SD02 [II 区 SD02]

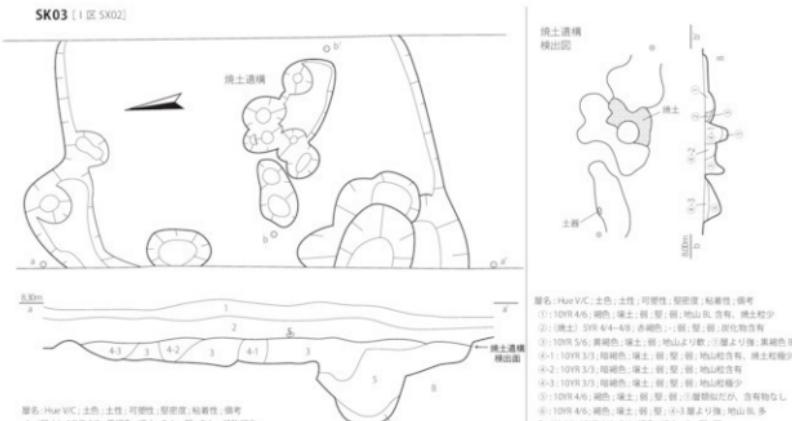


第7図 矢田新遺跡 遺構実測図 2



基名: Huu V/C; 土色: 土性; 可塑性; 脆密度; 黏着性; 備考  
 1: (耕土) 10YR 3/2; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; なし; 植物根少  
 2: 10YR 3/3; 黑褐色; 塚土; 例; やや軟; 中; 地山B; 枝少; 土块少  
 3: 10YR 3/4; 黑褐色; 塚土; 例; やや軟; 地山B; 含有; 黑褐色 B; 少  
 B: (地山) 10YR 4/6-5/6; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; 例;

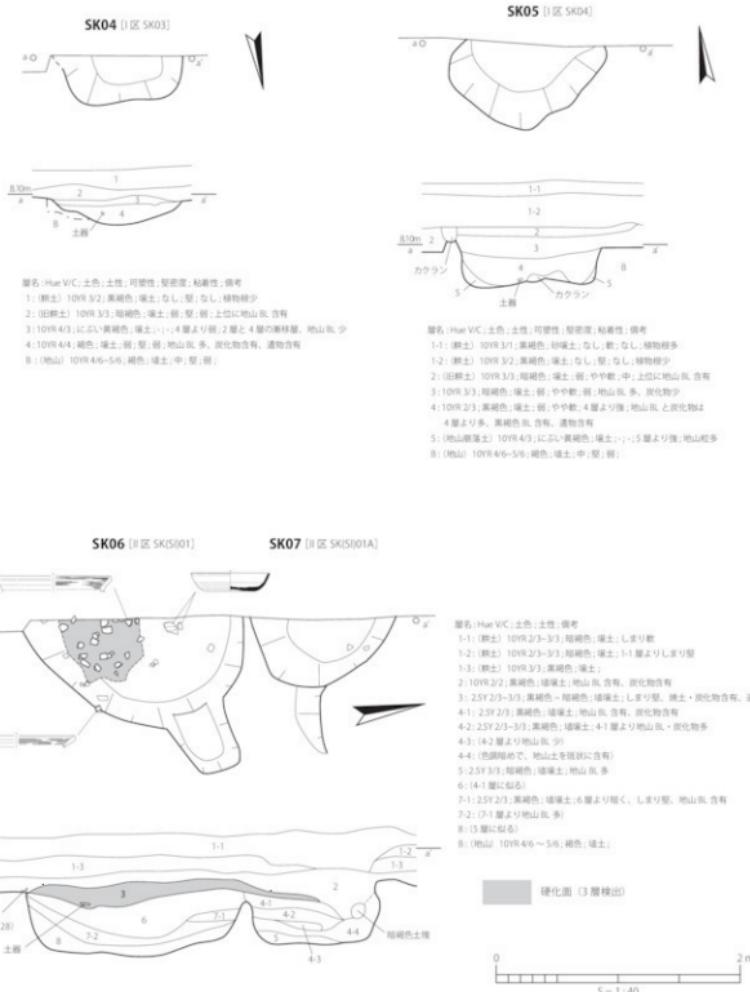
基名: Huu V/C; 土色: 土性; 可塑性; 脆密度; 黏着性; 備考  
 1-1: (耕土) 10YR 3/1; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; なし; 植物根多  
 1-2: (耕土) 10YR 3/2; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; なし; 植物根少  
 2: (地山土) 10YR 3/3; 黑褐色; 塚土; 例; やや軟; 中;  
 3: 10YR 3/3; 黑褐色; 塚土; 例; やや軟; 中; 地山B; 含有; 黑褐色 B; 多  
 4: 10YR 2/3; 黑褐色; 塚土; 例; やや軟; 4層より堆; 地山B; 多; 黑褐色 B; 含有; 面化物含多; 地上松根少; 道路含有多  
 5: (地山隙端土) 10YR 4/3; 黄褐色; 塚土; 中; 例; 地山粒多  
 B: (地山) 10YR 4/6-5/6; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; 例;



基名: Huu V/C; 土色: 土性; 可塑性; 脆密度; 黏着性; 備考  
 1: 10YR 4/6; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 2: (地山) 5/6; 黑褐色; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 4-1: 10YR 3/3; 黑褐色; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 4-2: 10YR 3/3; 黑褐色; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 4-3: 10YR 3/4; 黑褐色; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 5; 10YR 4/6; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 6; 10YR 4/6; 黑褐色; 塚土; 例; 地山B; 含有; 地上松根少  
 B: (地山) 10YR 4/6-5/6; 黑褐色; 塚土; 中; 黏; 例;



第8図 矢田新遺跡 遺構実測図 3



第9図 矢田新遺跡 遺構実測図 4

に関連する貼り床と考えられ、下層の土坑は掘り方土坑の可能性が高い。遺物は多量の土師器・須恵器と、少量の鍛治滓が出土した。なお1片だけ瓷器系中世陶器（加賀窯？）がSK06上面付近で出土している。図化遺物はNo.21～25・30・35で、これらは一部を除いて概ね8世紀代に収まる。

### 第3節 発見された遺物（第10～12図）

出土した遺物は、I区とII区合わせてテンパコ3箱程の分量である。大半を古代の土師器と須恵器が占め、鍛治滓やフイゴ羽口等の鍛治関連遺物と鉄製品がそれに次ぐ。

#### （1）I区出土遺物（1～20）

1～3、20は土師器（質）。1～3は長胴釜の口縁部で、1は古手の在来型煮炊具で古代I期（7世紀前半）、2と3は端部形状から前者が古代III～IV期（8世紀代）、後者が古代IV～V期（8世紀後半～9世紀前半）に比定される。4は銅口縁で古代III～IV期頃だろうか。5は壺A、6は赤彩壺Aの底部である。20は器種器形が不明の土師質の遺物で、外面に縱位隆帯を貼り付ける。図面で下にした部分は土器底部から剥離したような痕跡をもち、図面右上は円窓状の大孔になると思われる。

7～19は須恵器。7は短頸壺AあるいはBの蓋で、口が開いて端部で屈曲する古代III期の特徴をもつ。8と9は壺Bの蓋、10～12は蓋つまみ部で、概ね古代IV～V期の範疇だろう。13は壺B身の台部、14は壺Aの底部である。15は2条の沈線間に工具刺突とカキメを施す頗もしくは長頸瓶Fの胴部、16は横瓶の頸部、17は長頸瓶Aの台部、18と19は甕の口縁部と胴部と判断した。

#### （2）II区出土遺物（21～31）

21～25は土師器。21～23は長胴釜の口縁部で、端部形状から古代III～IV期の範疇と思われる。24は長胴釜の胴部で、底部丸底にさしかかる付近の部位である。24は甕の底部とした。

26～31は須恵器。26は壺Bの蓋で、乳頭状の小型つまみと端部折り返しを施さない小法量の特徴をもち、古代III期に比定される。27は壺B身の台部。28～30は壺Aで、28と29は体部外傾化する古代III～IV期頃、30は口径が大きくやや古手の古代III期の範疇だろう。31は短頸壺の頸部付近である。

#### （3）鍛治関連遺物・鉄製品（32～44）

鍛治関連遺物は、図化した32～35の鍛治滓のほか、鉄塊系遺物やフイゴ羽口もわずかに確認しているが、包含層（耕土・旧耕土）からの出土が多い。

鉄製品は37～44のような釘と思われる小径で棒状のものが多く出土している。39は先端部で、40は若干屈曲し、43はL字状に大きく屈曲している。

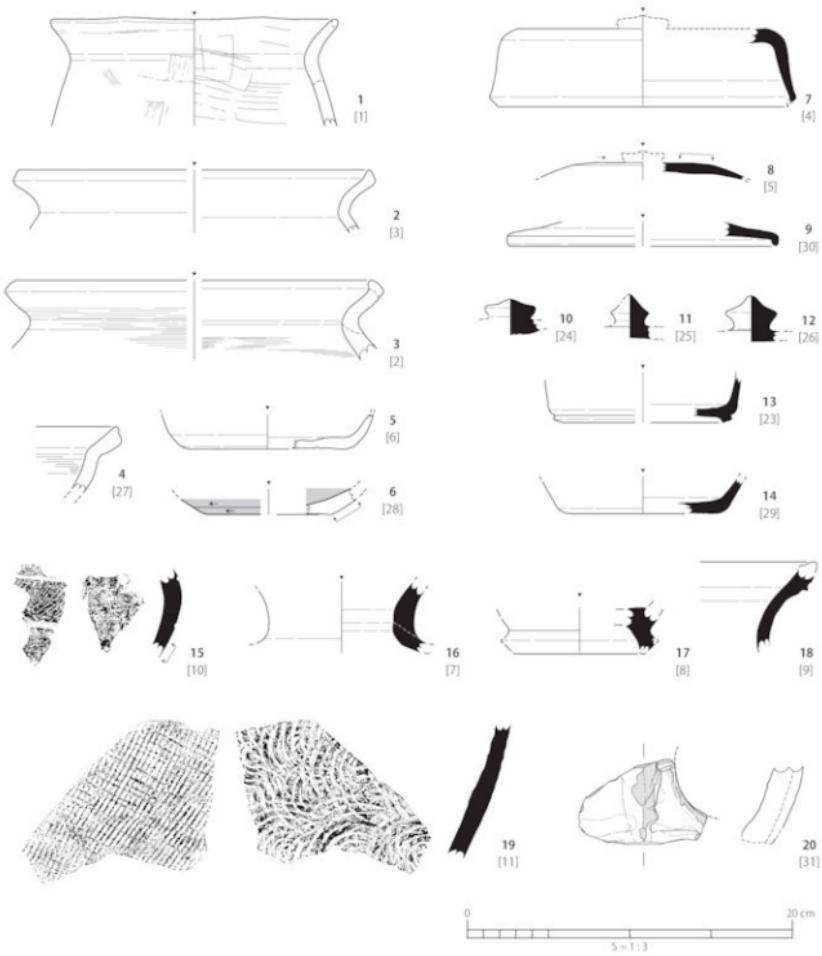
これらは厳密に時期比定できていないため、古代以降のものを含む可能性が高い。

### 第5節 小結

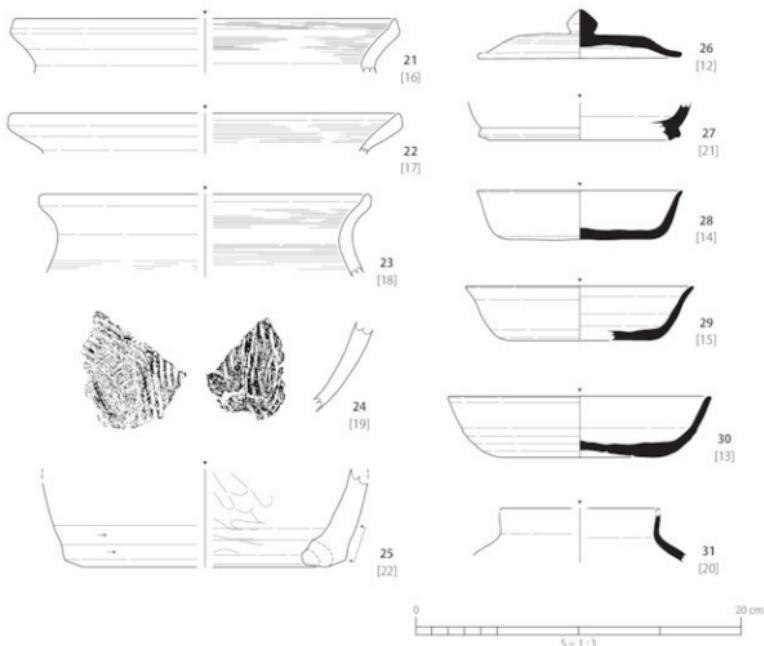
今調査区は、東西方向へ段状に切土・盛土されて耕地化された区域であるため、各調査区の遺構や遺物は削平の影響が比較的少ない東側に濃密だった。狹小な調査区域ではあったが、いくつかの新しい知見が得られた。

遺構は掘立柱建物2棟（SB08・09）のほか、断片的ではあるが焼土や硬化面（貼り床）を作う土坑（SK03・06・07）は竪穴建物の存在をうかがわせる発見である。また、SX01やSK06・07等の上層からは中近世の遺物が出土しており、古代以降の土地利用の一端が垣間見えた。

遺物は概ね飛鳥～平安時代（7～9世紀代）の土器が出土し、特に8世紀代が中心となるようである。さらに、平成19年度調査で窯道具は出土していたが、鍛治関連遺物は過去2回の調査では未発見で



第10図 矢田新遺跡 遺物実測図 1

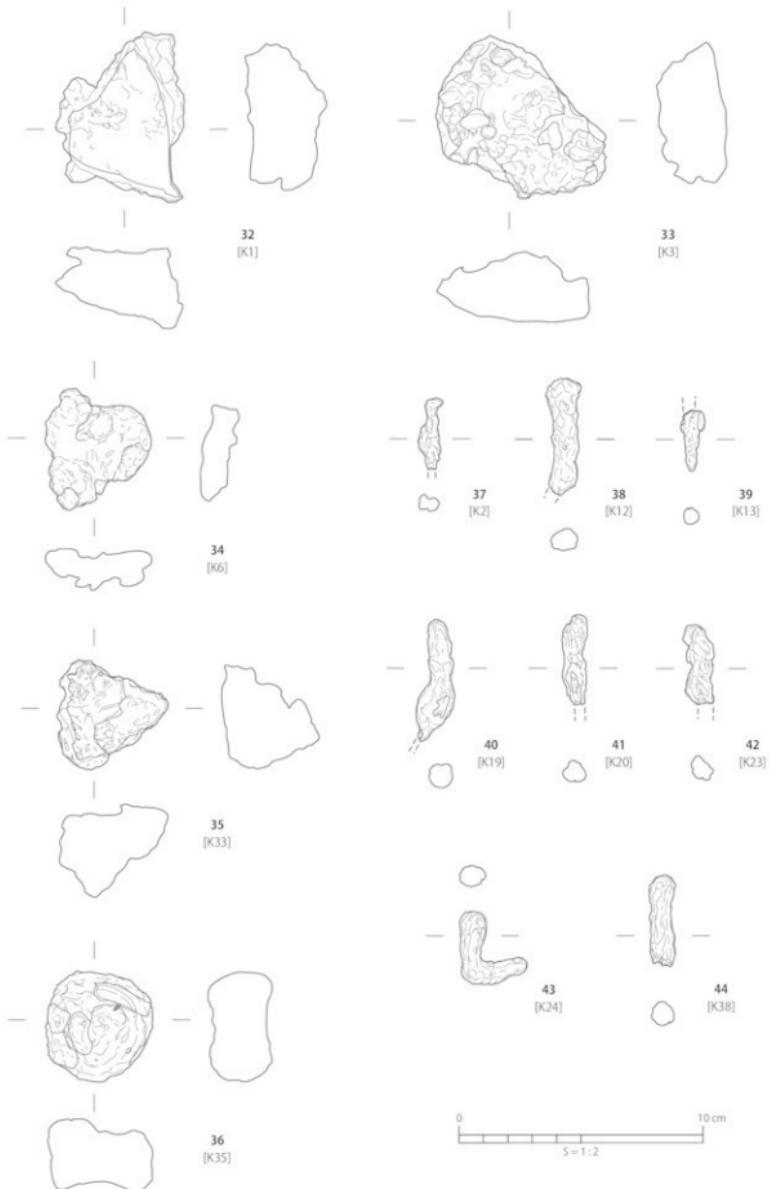


第11図 矢田新遺跡 遺物実測図 2

あり、本遺跡で出土した意義は大きい。月津台地上に存在する複数の古代集落と同様に、製陶・製鉄に関わった集団が本遺跡にも広がっていたことが示唆される。この点については、今調査区の南西で実施された県埋蔵文化財センターの調査（速報：県埋文2015）でも古代の鍛冶関連遺物が出土しており、同様の成果が得られている。

## 参考文献

- 小松市立博物館 1971 「加賀矢田新遺跡の第1次調査」『研究紀要』第6集  
 田嶋明人 1988年 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』  
 小松市教育委員会 2011年『小松市内遺跡発掘調査報告書VII』  
 (公財)石川県埋蔵文化財センター 2015『石川県埋蔵文化財情報』第34号



第12図 矢田新遺跡 錫冶関連遺物・鉄製品実測図

第2表 矢田新遺跡 出土遺物属性表

回	開闢	整理	区	出土位置	分類	器形	部位:寸法(cm)	/36	重量(g)	色調(表層:断面)	胎土	焼成	備考
10	1	1	I	SK04 覆土	土師器	長胴蓋	口:[17.5], 高:[6.6]	6	5YR7/8 : 7.5YR8/8	密	良好	古墳後期 - I期	
	2	3	I	SX03 覆土	土師器	長胴蓋	口:[21.5], 高:[3.8]	2	10YR8/2 : 10YR8/4	密	やや不良	III - IV期	
	3	2	I	SX01 下層	土師器	長胴蓋	口:[21.8], 高:[4.9]	3	7.5YR8/6 : 10YR8/4	密	やや良	IV - V期	
	4	27	I	SD03 覆土	土師器	浅鍋	高:[4.1]		10YR8/3 : N7	密	不良	III - IV期	
	5	6	I	SK02 覆土	土師器	杯 A	底:[10.5], 高:[2.1]		2.5YR8/3 : 2.5YR8/3	密	良好		
	6	28	I	耕土・旧耕土	土師器	赤彩陶 A	底:[7.9], 高:[1.6]		7.5YR7/6 : 10YR8/4	密	やや良	IV期?	
	7	4	I	SK02 覆土	須恵器	壺蓋	口:[17.8], 高:[3.9]		N6 : N7	密	良好	外面転化。II 3 - III期	
	8	5	I	SK02 覆土	須恵器	壺 B 盖	高:[1.1]		N8 : N8	密	やや不良		
	9	30	I	SX03 覆土	須恵器	壺 B 盖	口:[16.5], 高:[1.5]	2	N8 : N8	密	良好		
	10	24	I	耕土・旧耕土	須恵器	壺 B 盖	つまみ紐:3.1, 高:[2.1], つまみ高:1.3		N6 : N7	密	良好		
	11	25	I	耕土	須恵器	壺 B 盖	つまみ紐:2.4, 高:[2.7], つまみ高:2		N7 : N7	密	良好		
	12	26	I	耕土	須恵器	壺 B 盖	つまみ紐:3.6, 高:[2.8], つまみ高:2.1		N7 : N8	やや粗	やや不良		
	13	23	I	耕土・旧耕土	須恵器	壺 B 身	台:[10.9], 高:[3.1]		N7 : N4	粗	堅緻		
	14	29	I	耕土・旧耕土	須恵器	杯 A	底:[10.5], 高:[2.1]		2.5YR8/4 : 2.5YR8/4	密	不良		
	15	10	I	SX01 覆土	須恵器	甌 or 瓶 F7	高:[5.4]		10YR8/1 : N5	密	不良	I - II期	
	16	7	I	SK02 覆土	須恵器	横瓶	頸:[9.5], 高:[4.3]		N6 : N7	密	やや良	颈部接合A3類	
	17	8	I	SX01 覆土	須恵器	瓶 A	台:[8.0], 高:[2.6]		N8 : N8	密	良	IV - V期	
	18	9	I	SK03 覆土	須恵器	甌	高:[5.1]		N6 : N8	密	やや良		
	19	11	I	SK03 内C'付	須恵器	甌	高:[8.2]		N7 : N8	密	やや良	外タキキ類、内当て貝 D6類	
	20	31	I	SD03 内C'付	土師器?	不明	高:[5.2]		10YR5/3 : 10YR8/3	密	良		
11	21	16	II	SK06 No.10 +西軒精查	土師器	長胴蓋	口:[23.5], 高:[3.3]	4	7.5YR7/8 : 7.5YR8/6	密	良好	III - IV期	
	22	17	II	SK06 No.26	土師器	長胴蓋	口:[23.8], 高:[2.5]	3	10YR8/4 : 10YR8/4	密	良好	III - IV期	
	23	18	II	SK06・07 覆土	土師器	長胴蓋	口:[20], 高:[5.1]	3	7.5YR7/8 : 7.5YR7/8	密	良好	III - IV期	
	24	19	II	SK07 床面直上	土師器	長胴蓋	高:[5.5]		7.5YR6/8 : 10YR8/6	やや粗	良	外タキキDa類、内当て貝 Ha類	
	25	22	II	SK06・07 覆土 +P23	土師器	甌	底:[17.3], 高:[6]		7.5YR7/6 : 7.5YR8/6	粗	良好		
	26	12	II	Ⅱ耕土(包含層)	須恵器	壺 B 盖	口:12.6, つまみ紐:1.9, 高:3, つまみ高:1.5	6	N7 : N8	密	良好	重鏡Ⅰ類、III期	
	27	21	II	P2	須恵器	壺 B 身	台:[11], 高:[2.3]		N5 : N8	やや粗	やや良		
	28	14	II	Ⅱ耕土(包含層)	須恵器	杯 A	口:[12.6], 底:[10], 高:3	1	N7 : N7	密	良	重鏡Ⅱ類、III - IV期	
	29	15	II	西カベ精查	須恵器	杯 A	口:[14.1], 底:[10], 高:3.5	2	N7 : N7	密	良	重鏡Ⅱ類、III - IV期	
	30	13	II	SK06 No.20	須恵器	杯 A	口:[16.2], 底:[12], 高:3.7	11	5Y6/1 : N8	密	堅緻	III期	
	31	20	II	P38	須恵器	短縄甌	口:[9.6], 高:[3]	4	5Y6/1 : N7	密	堅緻		
12	32	K1	I	耕土・旧耕土	楕形鍛治陣(含鉄)	長:7, 幅:5.3, 厚:3.4		133.62				メタル度:H, 磁着度:7	
	33	K3	I	耕土・旧耕土	楕形鍛治陣(含鉄)	長:6.7, 幅:7.0, 厚:3.4		124.54				メタル度:H, 磁着度:4	
	34	K6	I	SX01 下層	楕形鍛治陣(含鉄)	長:5.0, 幅:4.3, 厚:2.0		42.07				メタル度:H, 磁着度:4	
	35	K33	II	SK06・SK07 覆土	楕形鍛治陣(含鉄)	長:4.5, 幅:4.6, 厚:4.2		84.00				メタル度:H, 磁着度:3	
	36	K35	II	耕土(1-4層)	鉄製品	長:4.6, 幅:4.4, 厚:3.2		64.28				メタル度:L, 磁着度:4	
	37	K2	I	耕土・旧耕土	鉄製品(釘?)	長:(2.9), 幅:0.9, 厚:0.8		1.60				メタル度:H, 磁着度:3	
	38	K12	I	耕土・旧耕土	鉄製品(釘?)	長:(4.8), 幅:1.4, 厚:1.3		6.10				メタル度:なし, 磁着度:1	
	39	K13	I	耕土・旧耕土	鉄製品(釘?)	長:(2.5), 幅:1, 厚:0.7		1.20				メタル度:H, 磁着度:2	
	40	K19	I	SX01 覆土	鉄製品(釘?)	長:(5), 幅:1.5, 厚:1.3		6.09				メタル度:なし, 磁着度:1	
	41	K20	I	SX01 覆土	鉄製品(釘?)	長:(3.7), 幅:1, 厚:1		3.05				メタル度:なし, 磁着度:1	
	42	K23	I	耕土・旧耕土	鉄製品(釘?)	長:(3.3), 幅:1.3, 厚:1		38.01				メタル度:H, 磁着度:1	
	43	K24	I	耕土・旧耕土	鉄製品(釘?)	長:3, 幅:1.1, 厚:1.1		4.84				メタル度:なし, 磁着度:1	
	44	K38	II	耕土(1-3層)	鉄製品(釘?)	長:3.8, 幅:1.1, 厚:1		4.44				メタル度:H, 磁着度:3	

図	測定	整理	区	出土位置	分類	器形	部位:寸法(cm)	/36	重量(g)	色調(表層:断面)	胎土	焼成	備考
			K4	I耕土・旧耕土	鉄塊系遺物	長:4.1,幅:3.6,厚:2.5		42.88					メタル度:M, 磁着度:5
			K5	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:2.7,幅:1.6,厚:1.4		5.47					メタル度:なし, 磁着度:1
			K7	I耕土・旧耕土	鉄製品(?)	長:5.6,幅:2.1,厚:1.7		24.57					メタル度:特L, 磁着度:4
			K8	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:4.5,幅:4.3,厚:3.1		38.19					メタル度:H, 磁着度:3
			K9	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:3.6,幅:3.9,厚:2.1		19.38					メタル度:H, 磁着度:2
			K10	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:3,幅:2.8,厚:1.7		17.65					メタル度:H, 磁着度:3
			K11	I耕土・旧耕土	鉄製品(?)	長:8.3,幅:1.4,厚:1.1		13.74					メタル度:M, 磁着度:4
			K14(1)	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:1,幅:0.8,厚:0.5		0.22					メタル度:なし, 磁着度:2
			K14(2)	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:1.4,幅:1.2,厚:1		1.57					メタル度:なし, 磁着度:2
			K14(3)	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:1.3,幅:1.8,厚:1.1		2.40					メタル度:なし, 磁着度:2
			K15	I SX01 覆土	銅治津(含鉄)	長:4.2,幅:2.5,厚:2.3		34.97					メタル度:なし, 磁着度:1
			K16	I SX01 覆土	銅治津(含鉄)	長:3.8,幅:2.2,厚:2.1		17.43					メタル度:なし, 磁着度:2
			K17	I SX01 覆土	銅治津(含鉄)	長:2.8,幅:2,厚:1.5		8.90					メタル度:なし, 磁着度:1
			K18	I SX01 覆土	鉄製品(?)	長:5.9,幅:1.7,厚:1.5		7.17					メタル度:なし, 磁着度:1
			K21	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:3.7,幅:3.6,厚:1.6		29.12					メタル度:なし, 磁着度:1
			K22	I耕土・旧耕土	鉄製品	長:2.6,幅:0.6,厚:0.6		0.71					メタル度:なし, 磁着度:1
			K25(1)	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:2,幅:1.8,厚:1.5		2.42					メタル度:なし, 磁着度:1
			K25(2)	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:2,幅:1.4,厚:1.4		3.86					メタル度:なし, 磁着度:1
			K26	I SK02 覆土	銅治津	長:3.6,幅:3,厚:2.1		10.72					メタル度:なし, 磁着度:1
			K27	I SK03 覆土	銅治津 (含鉄・強H付)	長:4.7,幅:3.7,厚:3.4		24.50					メタル度:なし, 磁着度:1
			K28	I(SK01覆土)	銅治津(含鉄)	長:2.3,幅:2.1,厚:1.3		5.45					メタル度:なし, 磁着度:1
			K29	I P4	銅治津(含鉄)	長:2.5,幅:2.3,厚:1		5.25					メタル度:なし, 磁着度:1
			K30	I耕土・旧耕土	銅治津	長:3.6,幅:3.2,厚:1.2		12.08					メタル度:なし, 磁着度:1
			K31	I耕土・旧耕土	銅治津(含鉄)	長:2,幅:1.4,厚:0.9		3.57					メタル度:なし, 磁着度:2
			K32(1)	I耕土・旧耕土	羽I	長:(3),幅:(3.8),厚:1.9		16.46					
			K32(2)	I耕土・旧耕土	羽I	長:(2.5),幅:(2.9),厚:1.7		11.36					
			K32(3)	I耕土・旧耕土	羽I	長:(3.4),幅:(2.1),厚:(2.2)		4.36					
			K34	II SK06・SK07 覆土	銅治津(含鉄)	長:3.4,幅:2.4,厚:2.3		8.50					メタル度:H, 磁着度:3
			K36	II 南が精查	鉄製品(破片多数)	長:4.1,幅:3.6,厚:1.8		85.85					メタル度:特L, 磁着度:5
			K37	II 造構精査	銅治津(含鉄)	長:4,幅:2.4,厚:2.3		18.52					メタル度:なし, 磁着度:2
			K39	II P13	銅治津(含鉄)	長:3.1,幅:2.1,厚:1		4.82					メタル度:なし, 磁着度:2
			K40	II P36	銅治津(含鉄)	長:1.9,幅:1.8,厚:1.1		4.09					メタル度:なし, 磁着度:1

#### 【遺物觀察表 凡例】

- ( )は残存値、[ ]は復元値、長さ・幅・厚さは最大値、/36は口縫部残存率を示す
- ・色調は表層の釉化部分や赤彩、黒斑を除く色調と断面色調を示す
- ・胎土は密、やや粗、粗の3段階、燒成は緻密、良好、やや良、良、やや不良、不良(生焼)の5段階の相対的な評価である
- ・磁着度は標準磁石を用いて計測し、I ~ 8までの数値で磁着の大きさを表す
- ・メタル度は専用金属探知機を用いて計測し、鍛化(△)・H(○)・M(◎)・L(●)・特L(☆)の順で感度の高さ(金属鉄の残存度)を表す

#### 【上層計表記(一部除く)】

可塑性: NP(なし) < SP(弱) < VP(中) < VP(強) < EP(極強)

堅着性: NS(なし) < SS(弱) < S(中) < VS(強)

< VH(すこぶる堅) < EH(堅結)

粘着性: NS(なし) < SS(弱) < S(中) < VS(強)

※日本ペトロジー学会編 1997年『土壤調査ハンドブック改訂版』に基づく

## 第三章 五郎座貝塚発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査に至る経緯

小松市今江町地内での住宅新築計画について、平成25年3月15日付けで個人（以下、依頼主）より埋蔵文化財の取り扱い協議を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「五郎座貝塚」の範囲に含まれていることから、試掘調査によって埋蔵文化財の有無の確認が必要と回答した。

「五郎座貝塚」は当該地の西側にかつて存在した「五郎座台地」に立地する縄文時代の貝塚を伴う集落跡として周知されているが、台地は削平によって現存しない。当該地の試掘調査が必要だったのは、台地の周縁部の削平を受けていない範囲に含まれていたことによる。

試掘調査は2度にわたって実施した。

1回目は平成25年3月26日に実施、当初はそれほど深くない予想だったこともあり、手掘りでの調査としたが、盛土が予想外に厚かったために掘り切れず、主に中世の遺物を確認したところで後日再調査することになった。

2回目は年度をまたいで平成25年4月18日に実施、今度は重機を用いた。この結果、盛土は約70cmあり、この下に黒色～黒褐色の壊質土が約60cm、この層から主に古代～中世の遺物を確認した。地山は淘汰された中粒～粗粒砂層であり、この上に黒色～黒褐色の砂質土（いわゆる「クロスナ」）



第13図 五郎座貝塚 調査地の位置

を部分的に認め、この層から多数の縄文土器片を確認した。

2回目の試掘調査の結果、「五郎座貝塚」として周知されている遺跡の範囲に含まれているとして、翌日の4月19日付けて依頼主に埋蔵文化財の適切な保護措置が必要と回答した。これを受け、また翌5月9日付けて文化財保護法93条の発掘届が提出され、地盤改良の方法の検討もされて来たが、最終的には表層改良が採用された。これによって、埋蔵文化財の現状保存が不可能となり、発掘届は5月16日付けて、発掘調査による記録保存を講じる旨を付記して石川県教委文化財課に進達した。

## 2 調査の経過と概要

発掘調査は5月23日に着手、翌6月13日に完了した。

重機による表土除去は盛土掘削とし、壇質土からは作業員による手掘り掘削とした。縄文時代の包含層と考えられるクロスナ層の範囲をおさえる目的であり、結果、それは試掘トレーンチを挟んで大小二つの略円形プランとなった。特に大きい方のプランは、検出までに縄文土器片などの出土が多く、豊穴建物跡の可能性も想定して作業にあたってもらったが、結果を先に述べれば、この想定は空振りだった。

調査地は、台地の周縁部だったこともあり緩やかな傾斜地だが、盛土と壇質土を取り除いた状態では殆ど傾斜がない。実際には台地の外側の（旧）浜堤列の範囲だったので、調査範囲に台地の壇質土が一部に見える予想を事前に立てていたが、こちらも空振りだった。

現地調査は、クロスナ層で埋まった二つの土坑を調査して終了となり、埋め戻した上で依頼主に引き渡してすべての作業を完了した。

## 3 出土品整理

出土遺物の整理は、分類・接合・実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成29年度に実施した。デジタルトレース等についても、平成29年度内に実施したものである。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 層位の所見（第15図）

前節試掘調査段階の所見と発掘調査の所見（第16図 西壁）及び遺物取り上げ層位（第3表）を対応させると、盛土=I・II層=盛土、壇質土=III・IV層=包含層、砂質土=V層=地山、となる。

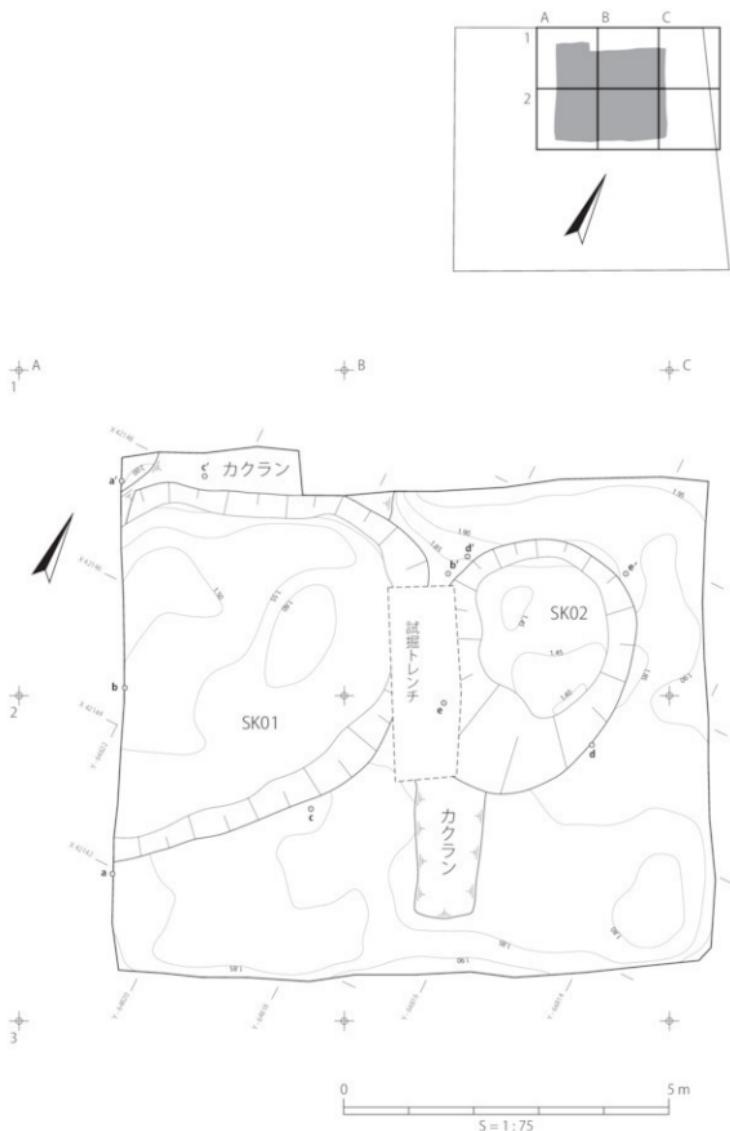
遺物の出土状況は、大雑把にまとめると、クロスナ層=縄文時代以降、壇質土=古代以降、盛土=中世以降である。ただし、壇質土層は、地山砂やこの層に含まれていたと見られるノジュールがしばしば認められるなど不自然な地層であり、整地等の土木工事で形成された地層と考えられる。

### 2 遺構（第14～15図）

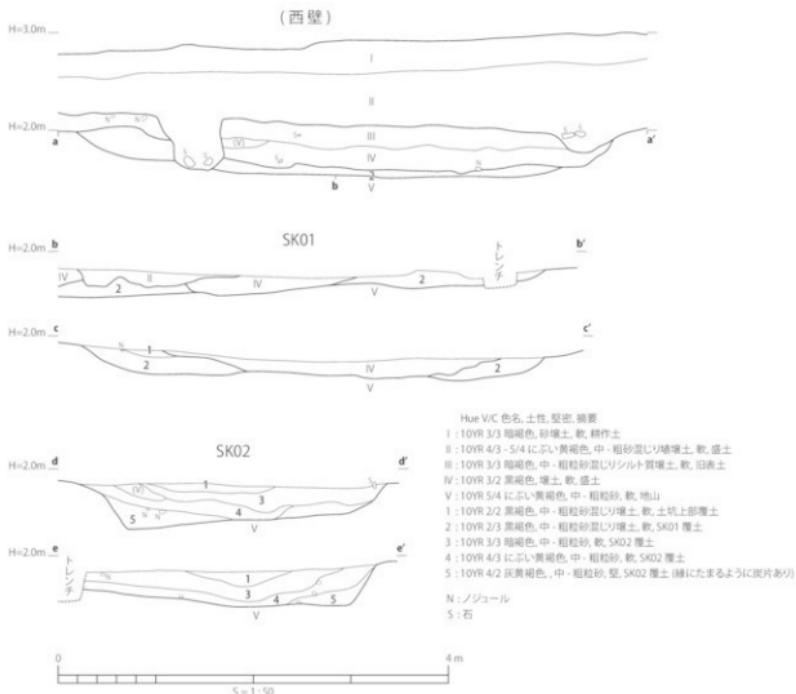
**SK01** いびつな梢円形プランで、短径4.7m、長径5m以上、地山砂層検出レベルから約30cmまで掘り下げられた豊穴状遺構である。底面は、いくらか凹凸はあるものの概ね水平に整形されているが、焼面や柱穴等は認められない。掘方は完全には埋まっておらず、流れ込んだクロスナ層(1・2層)が輪状に分布しており、浅い擂鉢状の状態で壇質土(III・IV層)がその上に堆積している。

遺物をよく包含していたのはクロスナ層で、縄文土器や弥生土器は概ねここからの出土である。

**SK02** 比較的整った梢円形プランで、短径3m、長径3m以上、地山砂層検出レベルから約50cmまで掘り下げられた土坑である。底面は北に傾斜しており、下層に炭混じりの堅さを感じる砂(5層)がたまっていた。この砂は、土坑のプランからはみ出して壇質土と地山砂層の間にも認められた。



第14図 五郎座貝塚 平面図



第15図 五郎座貝塚 断面図

### 3 遺物 (第16~19図)

#### (1) 繩文時代の土器 (1~45)

1は、中期後葉か末葉の土器と思われる。片が小さく文様や器形の類似例を挙げられないが、極粗粒砂が疎らに練り込まれた胎土の厚手の土器は、この時期固有の特徴である。

2~6は、後期前葉の土器である。おそらく同一個体か、少なくとも同じデザインの深鉢形土器であり、気屋式に類似している。器形、文様構成、5・6のように縦向きの条が太い右撫りの単節繩文といった特徴は気屋式そのものだが、最も目立つ特徴である三角刺突文が細かく刻み込んだ沈線のようになっている。

7も後期前葉の土器の底部だが、狭義の気屋式より時期が下る薄手で内外面が丁寧に研磨された深鉢形土器と思われる。

8~12は、後期後葉の土器である。浅く幅広の凹線を特徴とする井口式である。凹線の中まで丁寧に磨いているため、施文具まで分からないが、12の区切文は竹管等の筒状工具のようだ。

13~25は、後期後葉の粗製土器である。粗製といってもこの時期は丁寧な作りで、内面は口縁

端面までしっかり磨いている。13・16～23の縄文は右撲りの単節縄文、14・15・24は外面も磨き、25の条痕はサルボウ等の二枚貝を用いている。

26～28は、後期後葉の粗製土器の底部である。圧痕や調整などは分からぬ。

29～31は、晩期の上器である。29は、左撲り単節縄文で沈線文様に磨消縄文の加飾をする御経塚式で晩期前葉、30・31は浮線網状文土器で晩期末葉である。

32～45は晩期末葉の粗製土器である。こちらは名のとおりの粗製であり、内面のミガキは明確でなくどちらかといえばナデ調整で口縁部はそれほど丁寧な作りではない。32・33は外面もナデ調整で、35～45はイネ科草束の条痕文となる。35・45は内面側。条痕文である。時期的には、晩期末葉のほかに弥生前期にあたる柴山出村式を含むと思われるが、両者を分類で区分し切れない。ただ、35のように口縁端部を細かく刻むのは柴山出村式の特徴ではある。

極粗粒砂が疎らに練り込まれた胎土は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期前葉にも見られる。すなわち32～45がそうだが、こちらは中期のものと比べて明らかに薄手で、区別は容易な部類である。

## (2) 弥生時代の土器 (46～50)

46～49は中期前葉の土器である。いわゆる条痕文系であり、イネ科草束を用いる点では縄文時代晩期の伝統を継承しているといえる。

48・49は同個体であり、49の破片だけ接合面がなかった。頸部が大きく外反し、その上に鋭角に内側へ折れ曲がる口縁部がつく受口状口縁が特徴的で、頸部以下はイネ科草束の条痕で文様が描かれるが、口縁部はヘラ状工具で重方形文や矢羽根状文など、前後の時期の在土地器に共通する意匠が採用されている。

50は中期中葉の櫛描文系土器である。口径が推定できなかったが、器種はおそらく直口系の壺形土器と思われる。

## (3) 縄文～弥生時代の石器 (51～58)

51は角柱状の残核で、両極打撃されている。素材剥片剥離というよりは楔形石器としての使用の結果だろうが、端部が丸く磨り減っていることから、最終的には穿孔具として使用されたようだ。

52は打製石鏨である。平基無莖の三角形で、基部は殆ど調整されていない。

53は打製石錐である。特に用途の定まらない削片の一角に突起を作出したものだが、「石錐」というよりは「穿孔具」として51と共に分類上一括した方がよいかもしれない。

54は緑色凝灰岩で、各面がそれぞれ剥離痕となっていて角柱状に加工する途上とすれば、菅玉製作工程品といえる。現代の碎石の可能性もあるが、少なくとも調査当時、出土位置は碎石の混入が発生する環境ではなかった。

55は打製石斧の基部破片である。火山礫凝灰岩の礫端片を加工している。57は同じ石材の礫石錐である。

56は、安山岩の細長い円盤の一端が欠けているが、全面を覆う擦痕に一部が覆われている。

58は、よく焼けた流紋岩の薄片に顕著な擦痕が認められ、と石として用いられたと考えられる。

これらの石器は、54を除いて縄文時代晩期末～弥生時代中期までの時期の土器の伴うと考えられる。54が玉作資料なら、弥生時代末～古墳時代前期にかけてのものといえるだろう。

## (4) 古墳時代～古代の土器 (59～75)

59～64は、61を除いて古墳時代前期の土師器である。59はくの字口縁の壺形土器、60は有段口縁の壺形土器、62・63は小型器台、64は鉢形土器である。

61は、口縁端部の特徴から、古代IV期の範疇で8世紀後半の壺形土器（釜）か。

65～75は須恵器である。65・66は壺Gのそれぞれ蓋と身であり、古代II期の範疇で7世紀後半であろう。74・75は壺である。こちらは断片的だが、稜を成さない肩部と下半が叩き整形がされていることから、壺Gと同時期のものと思われる。67～75の腹胴部片は、時期比定できる属性を見いだせないが、叩き目や当て具痕は同一工具の可能性があり、同個体かもしれない。

#### (5) 中世の土器 (76～79)

76は珠洲の壺である。輪轆成形と叩き成形が知られているが、後者のタイプである。

77はかわらけである。精緻な胎土の京都系とされるタイプである。実測の対象とした3点は同個体で、うち2点に油煤が認められ、この個体は灯明皿として使用されたと考えられる。

78は漁戸・美濃の小型の壺であり、茶入れであろう。

79は李氏朝鮮時代の粉青沙器の皿である。白化粧土を搔き落として文様を成す剥地と呼ばれるものである。

中世の遺物は積極的に年代に言及できる資料とは言えないが、高麗青磁の流れを汲む粉青沙器は16世紀前半まで生産された。

#### (6) その他の遺物 (80～86)

80～83は楕形鍛治滓である。月津台地の古代集落遺跡で必ずと言ってよいほど出土する代表的な遺物といえるが、中世御幸塚城周辺施設の遺物の可能性も考慮すべきか。

84～86は土錘である。木場潟を臨む立地条件から、すべて漁網錘と考えてよいだろう。

### 第3節 小結

冒頭で述べたように、五郎座貝塚はかつて存在した「五郎座台地」に立地する縄文時代の貝塚を伴う集落跡であり、その発見は、昭和34年から5年に渡って土採取工事現場で土器や石器が採集されたもので、遺構が確認された訳ではない。貝層にしても、台地の麓で井戸を掘る時に貝層に当たることは古くから知っていたものの「貝塚」を確認したものではなかったが、平成19年度に下水道工事に立ち会うことによって、時代不詳ながら貝層があることを記録には残している。

今調査区は、台地の麓に下りた潟畔の砂地にあり、調査した2基の土坑（または竪穴状遺構）はこの砂層を掘ったものである。掘削時期は不明だが、土坑に伴う可能性のある遺物で最も年代が新しいのは須恵器であり、これらで編年的な位置が分かれる資料は7世紀代である。

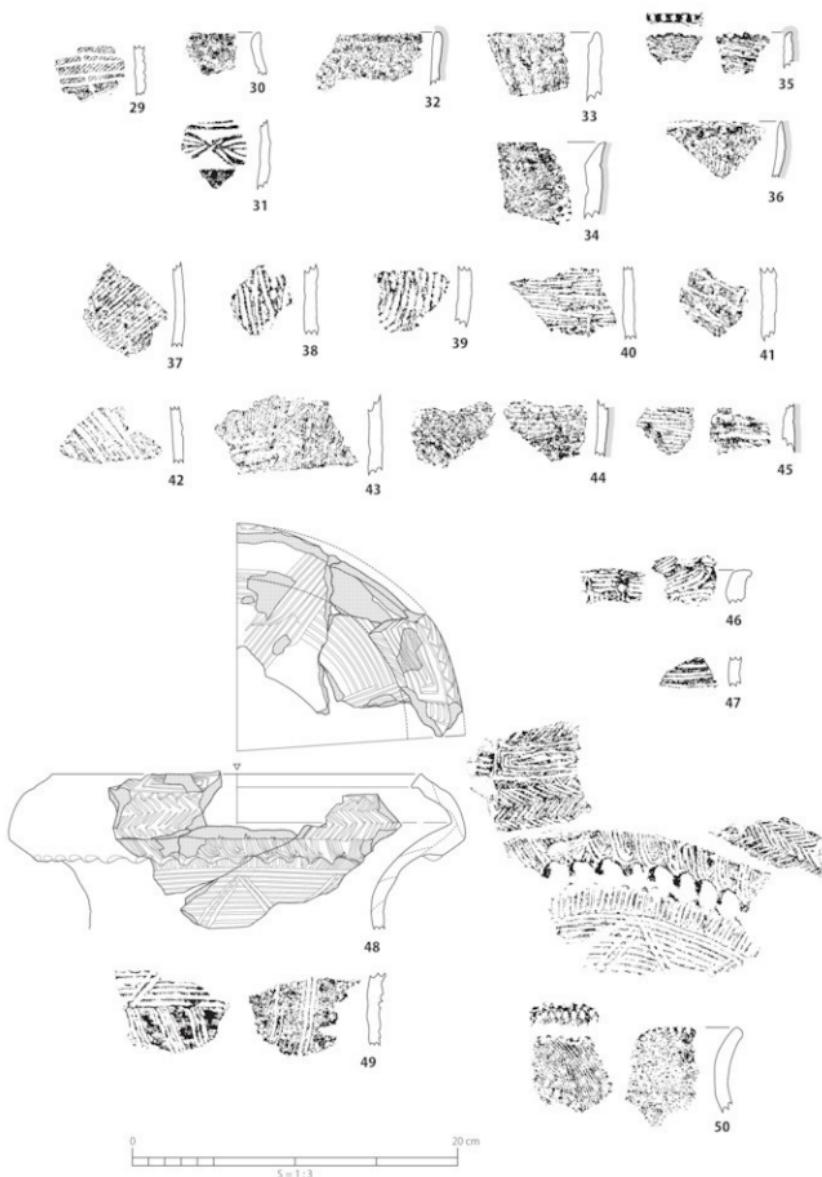
これらの土坑が砂地ごと埋まったのは自然堆積などではなく、人為的な要因を考えなければならない。本報告で壌質土=III・IV層とした土層がこれにあたり、この層準より上位に中世遺構の遺物が含まれる。非常に短絡的ではあるが、今調査地周辺で大規模な土木工事があったとすれば御幸塚城であり、歴史的には、文安2(1445)年に富権泰高が南加賀半国守護となつ頃から、慶長5(1600)年の浅井暉の戦いの頃まで、すなわち15世紀後半～16世紀の城である。本報告の中世遺物も、概ねこの時期と照らして矛盾しない。

### 参考文献

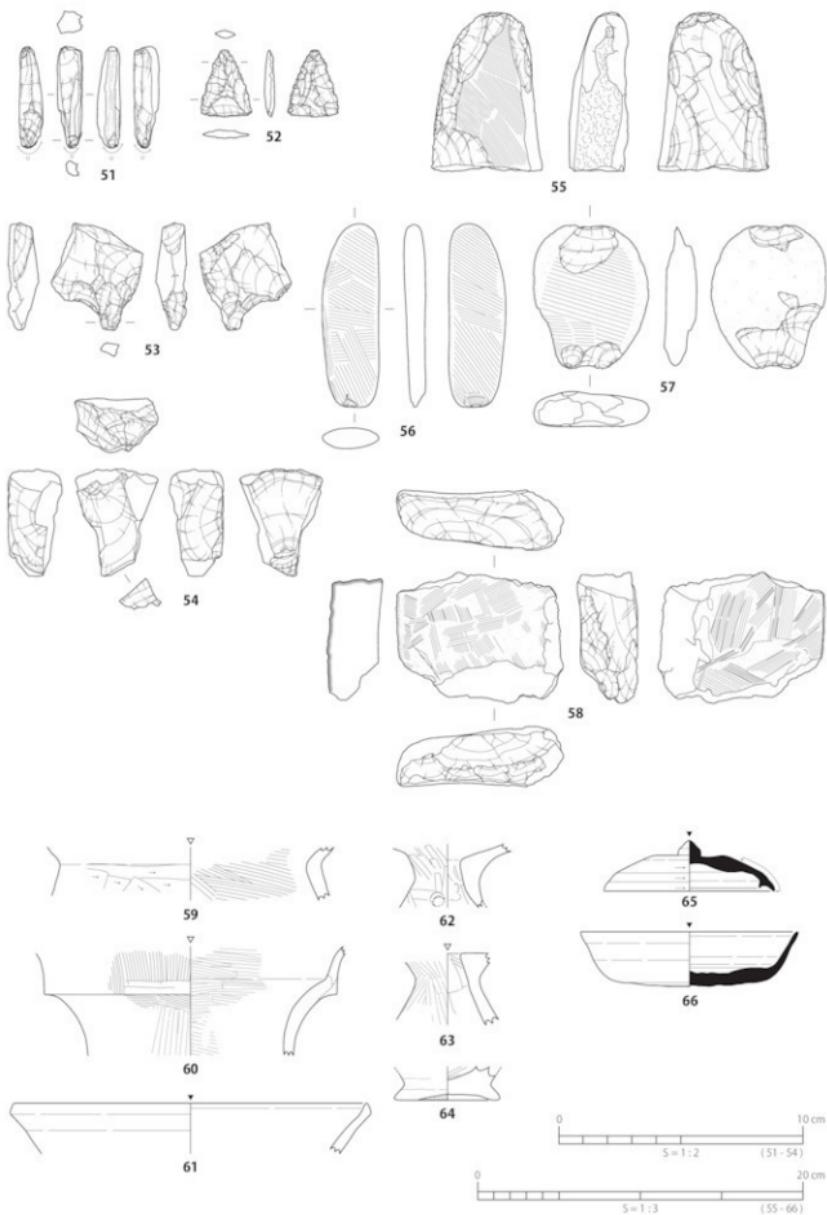
- 川 良雄 1969年『今江潟と今江町の歴史』今江町公民館 石川県小松市  
小松市教育委員会 2000年『今江五丁目遺跡』  
今江町史編纂委員会 2015年『今江町史』今江町内会 石川県小松市



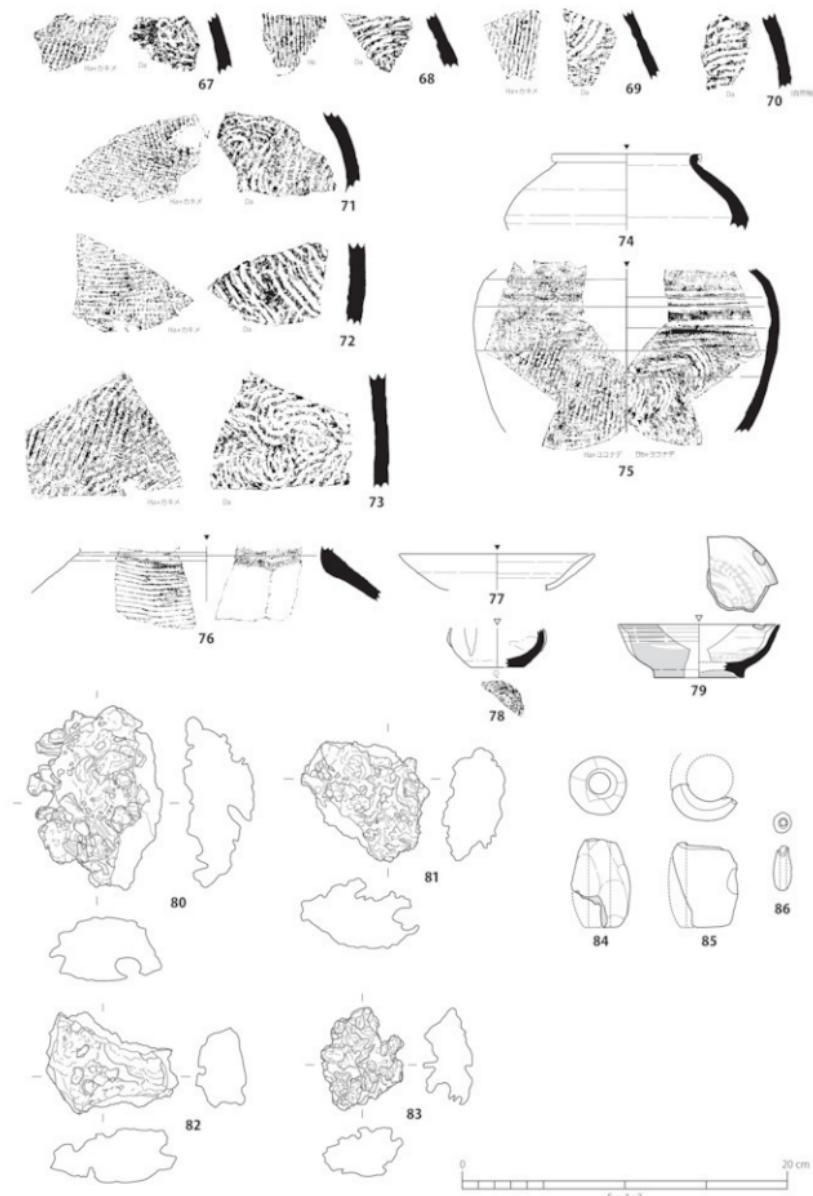
第16図 五郎座貝塚 出土遺物実測図 1



第17図 五郎座貝塚 出土遺物実測図 2



第18図 五郎座貝塚 出土遺物実測図 3



第19図 五郎座貝塚 出土遺物実測図 4

第3表 五郎座貝塚 遺物属性表

回	番号	実測	出土位置	分類	器形	寸法/質量	表層色調	地土色調	備考
1	1	な 48	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3	2.5Y 4/1	中期後期?
1	2	な 46	SK02-III	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3	10YR 7/2	気屋
1	3	な 47	SK02-II	礎文土器	浅鉢		10YR 6/3 - 6/2	10YR 6/2	気屋
1	4	な 45	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 6/2	10YR 5/1	気屋
1	5	な 43	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 6/4 - 8/3	10YR 6/1	気屋
1	6	な 44	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 6/4 - 8/3	10YR 6/1	気屋
1	7	な 49	A 2 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢	底:7cm/0.167	10YR 6/3 - 2.5Y 5/2	2.5Y 4/1	後期
1	8	な 52	B 2 通	礎文土器	浅鉢		5YR 6/4 - 5/3	2.5Y 4/1	
1	9	な 53	SK01-III	礎文土器	浅鉢		10YR 7/4	10YR 6/3	井口
1	10	な 54	A 1 通	礎文土器	浅鉢		2.5Y 4/2	10YR 3/2	井口
1	11	な 50	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 7/2 - 3/1	10YR 5/2	井口
1	12	な 51	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3 - 3/1	2.5Y 4/1	井口
1	13	な 15	SK01-I	礎文土器	浅鉢		2.5Y 6/1	2.5Y 7/2	後期軽削
1	14	な 20	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3 - 5YR 6/8	10YR 6/1	後期軽削
1	15	な 18	SK02-II	礎文土器	浅鉢		10YR 6/3	2.5Y 4/1	後期軽削
1	16	な 16	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		10YR 7/4 - 5YR 6/4	2.5Y 4/1	後期軽削
1	17	な 17	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		10YR 6/2	10YR 6/2	後期軽削
1	18	な 58	A 2 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3	10YR 5/2	後期軽削
1	19	な 59	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 5/2	10YR 5/1	後期軽削
1	20	な 57	A 2 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		10YR 7/2	2.5Y 6/1	後期軽削
1	21	な 55	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		2.5Y - 10YR 6/2	2.5Y 5/1	後期軽削
1	22	な 56	B 2 通	礎文土器	浅鉢		10YR - 7.5YR 7/3	2.5Y 6/1	後期軽削
1	23	な 60	SK02-I	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3	7.5YR 6/3	後期軽削
1	24	な 19	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 6/2	2.5Y 3/1	後期軽削
1	25	な 66	SK02-I	礎文土器	浅鉢		10YR 8/3 - 7/1	10YR 8/4 - 7/2	後期軽削
1	26	な 21	SK01-I	礎文土器	浅鉢	底:10cm/0.139	10YR 7/3	10YR 6/1	後期軽削
1	27	な 23	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢	底:5cm/0.167	10YR 7/3	2.5Y 5/1	後期軽削
1	28	な 22	A 1 通	礎文土器	浅鉢	底:6cm/0.250	10YR 7/3	2.5Y 5/1	後期軽削
2	29	な 67	SK01-I	礎文土器	浅鉢		2.5Y 5/2	2.5Y 3/1	銅鋤塙
2	30	な 72	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 5/2 - 4/1	10YR 4/1	長竹
2	31	な 68	SK01-III	礎文土器	浅鉢		2.5Y 6/4 - 4/1	2.5Y 3/1	長竹
2	32	な 62	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		10YR 5/2	2.5Y 4/1	後期軽削
2	33	な 63	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 5/3	10YR 5/2	後期軽削
2	34	な 64	SK01-I	礎文土器	浅鉢		7.5YR 7/4 - 6/4	2.5Y 6/1	後期軽削
2	35	な 71	B 1 通 (SK01)	礎文土器	浅鉢		7.5YR 7/6 - 10YR 5/2	10YR 5/2	後期軽削
2	36	な 61	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 6/2	5Y 3/1	後期軽削
2	37	な 37	A 2 通 (SK04)	礎文土器	浅鉢		10YR 8/3 - 7.5YR 6/4	2.5Y 4/1	後期軽削
2	38	な 38	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3 - 7.5YR 6/3	10YR 6/2	後期軽削
2	39	な 39	B 1 通 (SK02)	礎文土器	浅鉢		10YR 5/3 - 6/3	2.5Y 4/1	後期軽削
2	40	な 40	A 1 通	礎文土器	浅鉢		10YR 6/3 - 7.5YR 6/4	10YR 6/2	後期軽削
2	41	な 41	SK02-I	礎文土器	浅鉢		10YR 7/3	10YR 4/2	後期軽削
2	42	な 42	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 6/3 - 7/4	10YR 5/2	後期軽削
2	43	な 65	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 7/4 - 5/2	5Y 3/1	後期軽削
2	44	な 69	SK02-I	礎文土器	浅鉢		10YR 6/4	2.5Y 5/3	後期軽削
2	45	な 70	SK01-I	礎文土器	浅鉢		10YR 5/2	10YR 5/2	後期軽削
2	46	な 76	SK02-I	海生貝塙	海生貝塙		10YR 6/3	10YR 6/2	海生貝塙文系
2	47	な 73	B 1 通 (SK01)	海生貝塙	海生貝塙		10YR 6/3	10YR 6/2	海生貝塙文系
2	48	な 78	A 2 通 (SK04)	海生貝塙	海生貝塙	底:128cm/0.222, 壁:18cm/0.167	7.5YR 6/4	10YR 6/2	海生貝塙文系
2	49	な 74	SK01-I	海生貝塙	海生貝塙		7.5YR 6/4	2.5Y 5/1	海生貝塙文系
2	50	な 75	A 2 通 (SK01)	海生貝塙	海生貝塙		10YR 8/3	10YR 8/2	海生貝塙文系
3	51	こ 05	SK01-I	残核石器	穿孔貝	長:4.1cm, 幅:1.0cm, 厚:1.0cm, 重:5.02g 黒色安息香			
3	52	こ 06		打製石器	貝	長:2.7cm, 幅:2.0cm, 厚:0.4cm, 重:1.83g 黑色安息香			
3	53	こ 07	SK01-III	打製石器	貝	長:4.4cm, 幅:3.8cm, 厚:1.3cm, 重:13.74g 黄褐色			
3	54	こ 08	SK02-IV	工作工具類?	分割片	長:4.4cm, 幅:3.4cm, 厚:2.2cm, 重:25.60g 緑褐色凝灰岩			
3	55	こ 01	B 1 通 (SK01)	打製石器	貝	長:0.80cm, 幅:0.80cm, 厚:0.16cm, 重:30.93g 灰火曜凝灰岩			
3	56	こ 09	B 1 通 (SK01)	磨石磨石器	磨石	長:11.3cm, 幅:3.5cm, 厚:1.4cm, 重:77.7g 灰火曜凝灰岩			
3	57	こ 10	A 1 通	磨石磨石器	磨石	長:8.8cm, 幅:7.1cm, 厚:2.2cm, 重:168.2g 灰火曜凝灰岩			
3	58	こ 02	SK02-IV	砾石	貝	長:0.81cm, 幅:0.10cm, 厚:0.7cm, 重:254.9g 黄褐色			
3	59	な 27	A 2 通 (SK04)	土師器	蓋	長:16cm/0.139	2.5Y 6/6	5YR 7/6	古墳前期
3	60	な 31	A 1 通	土師器	蓋	長:18cm/0.093	7.5YR 7/4	10YR 8/4	古墳前期
3	61	な 28	B 1 通 (SK01)	土師器	蓋	長:22cm/0.056	7.5YR 7/6	10YR 8/3	古墳後半
3	62	な 32	B 1 通 (SK01)	土師器	酒台	長:4cm/1.000	5YR 7/6	5YR 7/6	古墳前期
3	63	な 30	B 2 通	土師器	酒台	長:4cm/0.167	10YR 6/3	7.5YR 7/3	古墳前期
3	64	な 29	A 2 通 (SK01)	土師器	鉢	底:6cm/0.333	7.5YR 6/4 - 6/3	10YR 7/3	古墳前期
3	65	な 80	SK02-II	須恵器	坪 G 盆		10YR 6/1	N 6/0	7c 楊平
3	66	な 79	SK02-II	須恵器	G 盆		N 7/0	N 7/0	7c 楊平
4	67	な 01	B 1 通 (SK01)	須恵器	蓋		N 4/0	N 5/0	
4	68	な 02	A 2 通	須恵器	蓋		N 5/0	N 5/0	
4	69	な 03	A 1 通	須恵器	蓋		N 5/0 - 3/0	5YR 5/1	
4	70	な 07	SK01-I	須恵器	蓋		N 4/0	N 5/0	
4	71	な 04	A 1 通	須恵器	蓋		N 5/0 - 3/0	N 5/0	
4	72	な 05	SK01-IV	須恵器	蓋		N 4/0	5YR 5/1 - 2.5Y 6/3	
4	73	な 06	B 1 通 (SK01)	須恵器	蓋		N 6/0	2.5Y 6/2	

回	番号	実測	出土位置	分類	图形	寸法 / 比率	表層色調	地土色調	備考
4	74	な 09-10	A-1 磁	磁器器	磁	径:1.9cm/0.111	N 5/0	N 7.0/- 6/0	
4	75	な 08	SK01-1	磁器器	磁	径:1.8cm/0.194	N 5/0	N 6/0	
4	76	な 14	B-1 磁	珠押	磁	径:1.5cm/0.083	N 5/0	N 7.0/-	
4	77	な 11-13	B-2 磁	かわらけ	磁	径:1.2cm/0.278	7.5YR 7/3 - 7/2	7.5YR 8/2 - 5/1	
4	78	な 34	A-1 磁	瀬戸美濃	磁人	底:3cm/0.389	10Y 6/2	2.5Y 8/1	
4	79	な 33	B-1 磁	粉青沙器	磁	径:1.0cm/0.167, 台:5.5cm/0.167, 高:3.3cm	5GY 6/1	N 6/0	
4	80	に 03	SK02-B1	楕形磁力浮 合鉄	長:11.3cm, 幅:8.3cm, 厚:4.4cm	重:315.7g, 磁石:2, メタル:M			
4	81	に 04	SK02-B2	楕形磁力浮	長:7.4cm, 幅:7.8cm, 厚:4.5cm,	重:197.0g 磁石:1, メタル:なし			
4	82	に 12	A-1 磁	楕形磁力浮	長:9.3cm, 幅:9.1cm, 厚:3.2cm,	重:164.1g 磁石:1, メタル:なし			
4	83	に 11	A-1 磁	楕形磁力浮	長:6.3cm, 幅:5.0cm, 厚:3.0cm	重:84.5g 磁石:1, メタル:なし			
4	84	な 24	SK01-1	土製品	土鍋	径:5.5cm, 径:3.6cm, 孔:1.3cm, 重:43.0g	2.5Y 7/4	2.5Y 5/1	
4	85	な 25	9-2 磁	土製品	土鍋	径:5.3cm, 重:30.2g	2.5Y 7/3	2.5Y 8/3	
4	86	な 26	B-1 伝 (SK01)	土製品	土鍋	径:5.7cm, 径:4.1cm, 孔:0.4cm, 重:24g	7.5YR 6/4 - 6/6	7.5YR 6/4	

## 第IV章 松谷廃寺跡確認調査

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査に至る経緯

白山信仰の重要寺院である中宮八院の一つである松谷寺跡の確認調査について、平成 18 年度から平成 21 年度の 4 ヶ年にわたって実施したところだが、この過程で発見されたのは 8 世紀前半まで成立期が測る可能性のある古代山林寺院遺構と考えられた。

これを受け、従来の中宮八院としての「松谷寺」と区別するために呼称を「松谷廃寺」と改め、平成 22 ~ 24 年度に継続して調査を実施することとなった。

#### 2 調査の経緯と概要

松谷廃寺跡として調査を継続したのは、松谷寺跡の包蔵地範囲を東側半分、平成 21 年度までの確認調査で「平坦面 A」である。ここで検出された礎石建物跡の補足調査と関連遺構の精査が主な目的である。

##### 〔平成 22 年度〕

基壇 A とその周辺に新たなトレンチを設定して補足調査を実施したところ、礎石建物 A は東に 1 間延長し、3 間 × 4 間となった。

また、調査対象とした平坦面 A の北端に塚状遺構 1 基、集石遺構 2 基を確認した。



第 20 図 松谷廃寺跡 調査位置図

#### 〔平成 23 年度〕

礎石建物 A のトレーナーをさらに追加・拡張して調査を継続した結果、規模は東にさらに 2 間延長し、4 間 × 5 間となり、これ以上延長しないことも確認した。

また、前年発見された塚状遺構と集積遺構を 3 基とも塚状遺構として詳細に調査、鎌倉時代から南北朝時代のものと考えられる石塔（相輪）が出土し、ここでようやく「松谷寺」の時期に係る時期の遺構を発見することとなった。

#### 〔平成 24 年度〕

前年の補足調査。すべての記録作業を終えてから、今回発見された遺構を砂で保護した上で埋め戻し、今回の調査を完了とした。

### 3 出土品整理

出土遺物の整理は、分類・接合・実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成 29 年度に実施した。デジタルトレス等についても、平成 29 年度内に実施したものである。

本来は、この後平成 24 ~ 28 年度まで実施した、同じく中宮八院の一つである蓮華寺跡の報告に合わせる予定であったが、調査完了から年数が経過したことと今後の国庫補助事業全体の出土品整理計画の都合から、ここで一旦報告して区切りとすることになった。

蓮華寺跡については、こちらも松谷庵寺跡と同様に古代に瀕る山林寺院跡と推定される遺構と遺物が発見されたため、平成 27 年度からは加賀国府・国分寺関連遺跡としての確認調査としており、松谷庵寺跡の評価は蓮華寺跡の出土品と記録の整理を待って、両者併せて行なうものとした。

## 第 3 節 確認調査の成果

### 1 遺構（第 21 ~ 24 図）

今回の調査対象となった平坦面 A は、西面と南面を削り出しによって造成されたと考えられる、北辺約 17.5m、南辺約 16.5m、東辺約 9m、西辺約 11m を測る略台形である。北面は緩斜面になってしまっており、ほとんど造成の痕跡は認められず、自然の地形を大きく改変するような造成は見られない。これは東面についても同様である。

この平坦面南端の最高所に整形された基壇 A があり、平成 18 ~ 19 年の確認調査で礎石建物 A は 2 間 × 4 間まで確認し、仏堂と評価したものの、建物の構造を復元するには規模が小さく、この点で補足調査が必要だった。それが平成 22 年度からの今回調査である。

平坦面北端では塚状遺構が 3 基発見された。発見の引き金になったのは 1 号塚の円碟の集中であり、3 基の中では最も保存状態が良い。

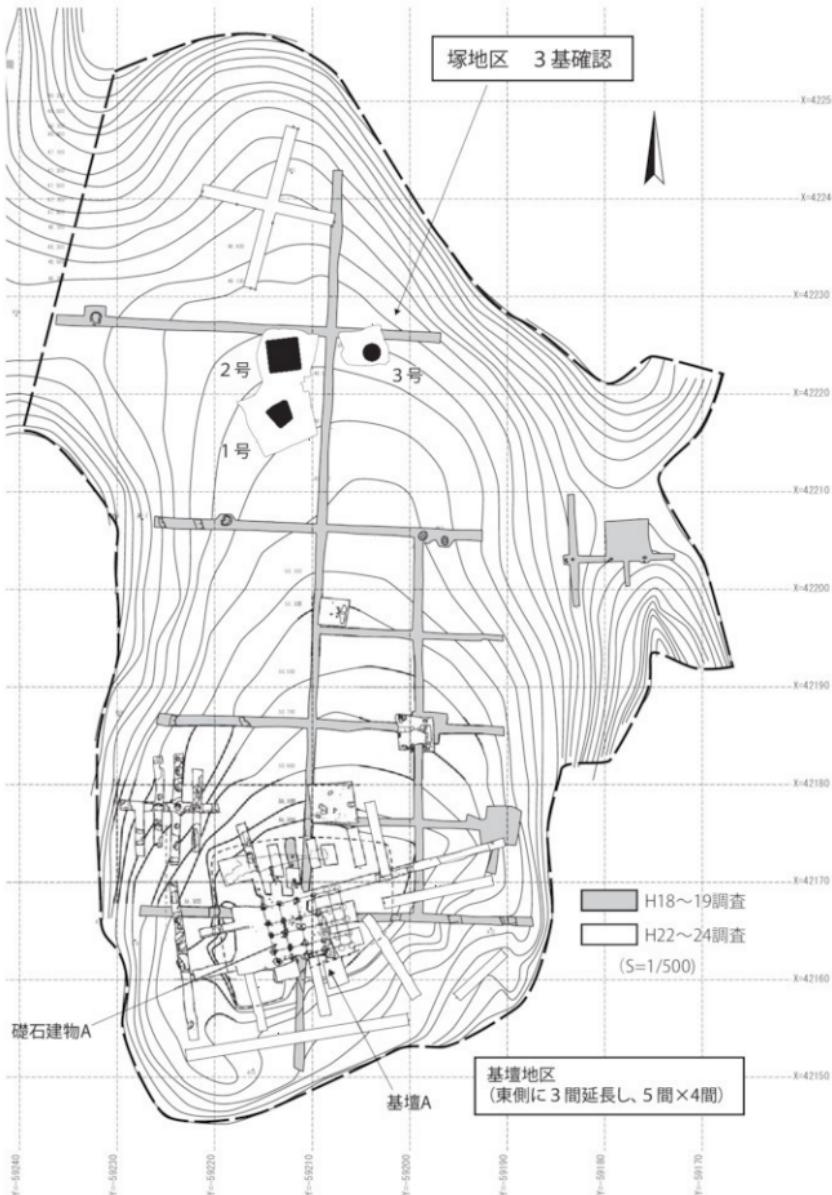
#### (1) 磂石建物 A（第 22 図）

今回調査の結果、建物規模は東側に 3 間延長し、5 間 × 4 間、二面庇の総柱建物である。前回報告のとおり仏堂と考えられ、須弥壇は前回報告で指摘した位置、図中では、建物中央の柱間のせまいところに設えられた可能性がある。

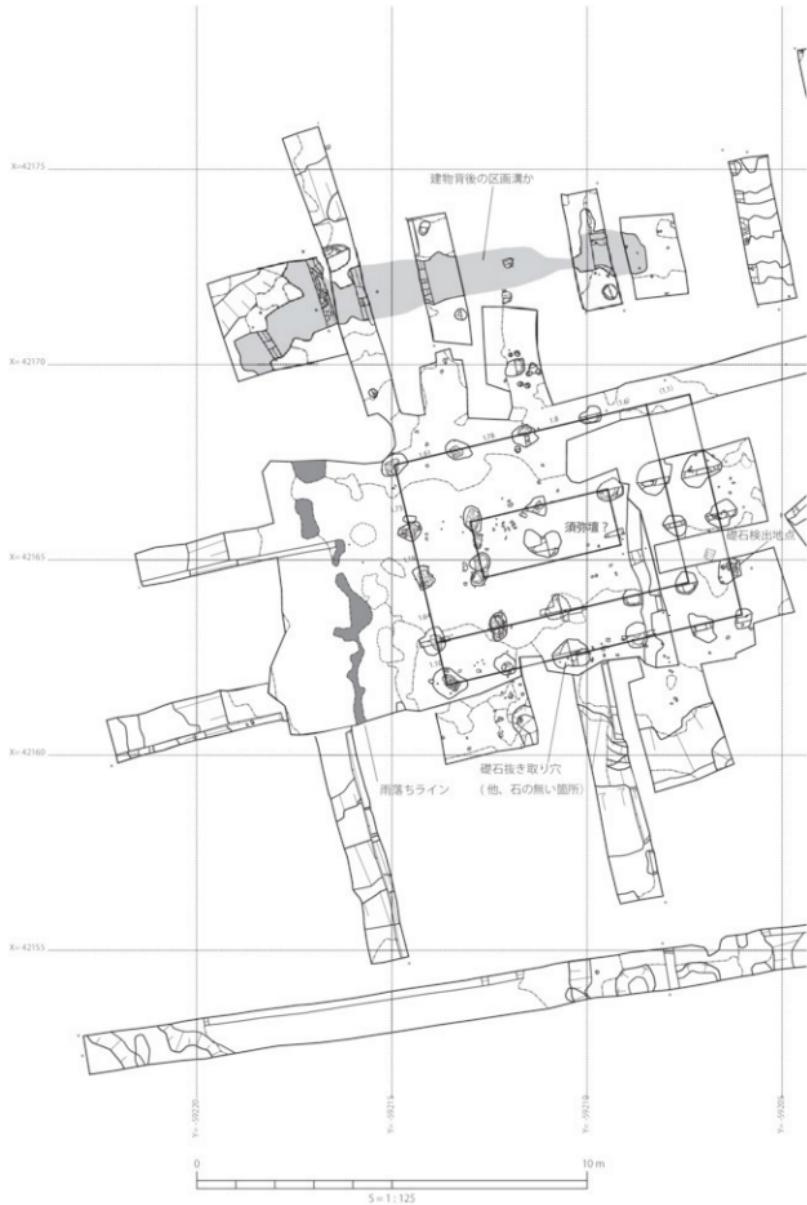
建物北面には区画溝らしき掘方も発見された。西面の帶状に延びる不整形なプランは、雨落ちの痕跡と思われる。

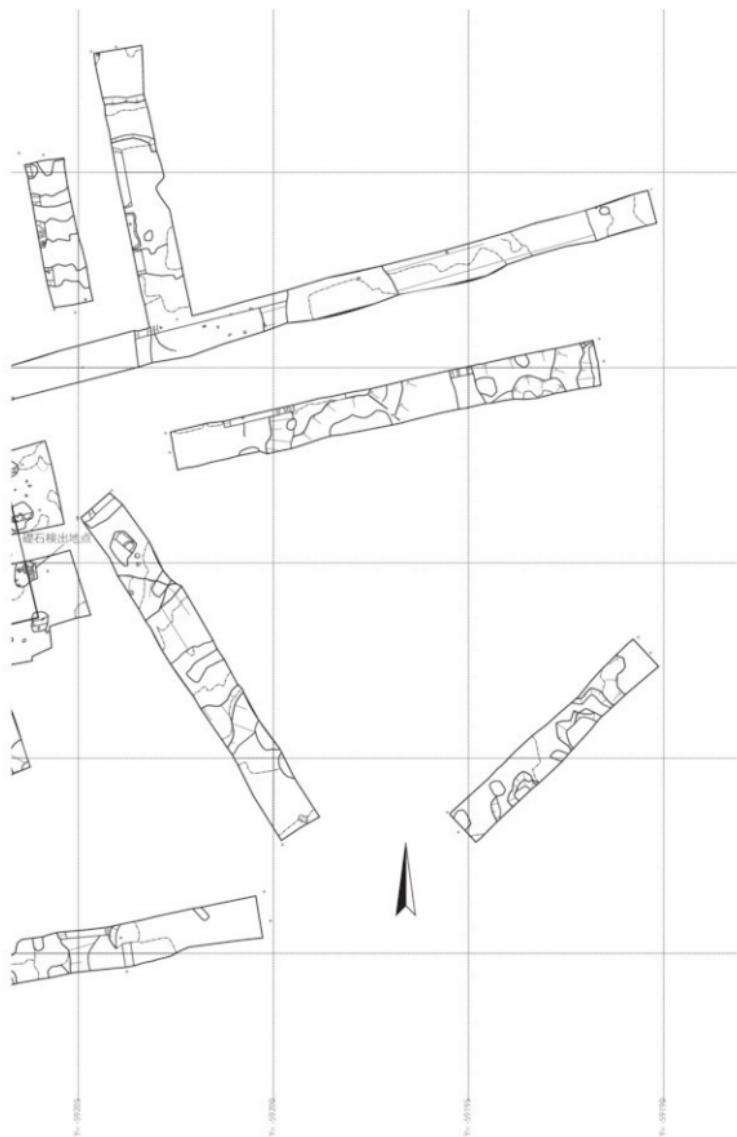
#### (2) 塚（第 23 ~ 24 図）

今回調査で発見された当初は「塚状遺構」と「集積遺構」という呼び方をしたが、調査の結果、すべて「塚」とした。

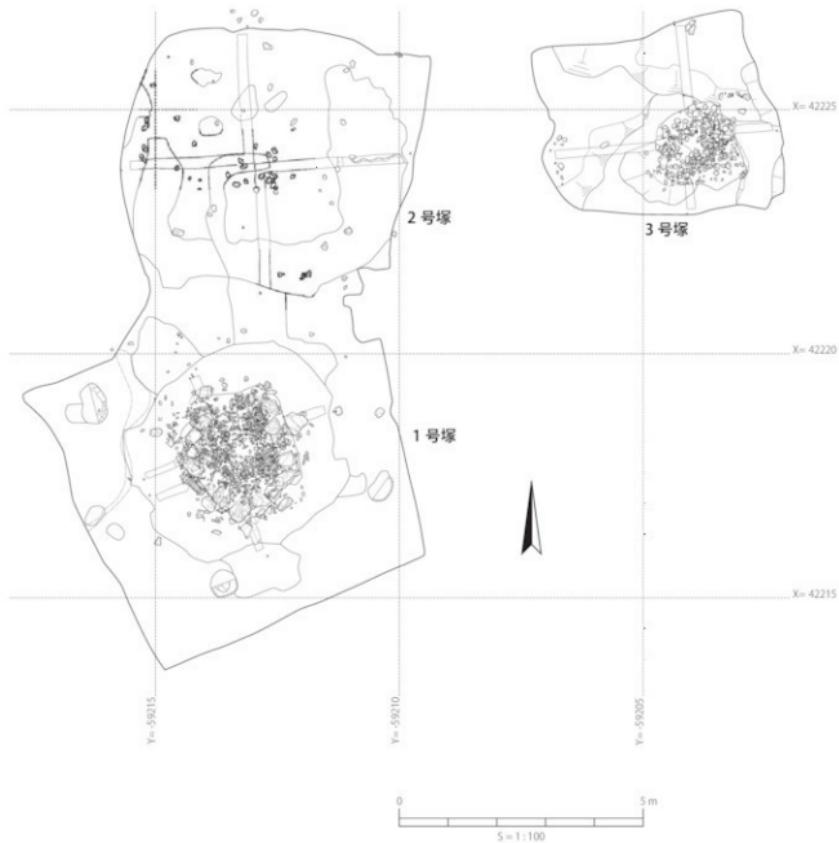


第21図 松谷庵寺跡 平坦面A 平面図





第22図 松谷廃寺跡 基壇地区 平面図

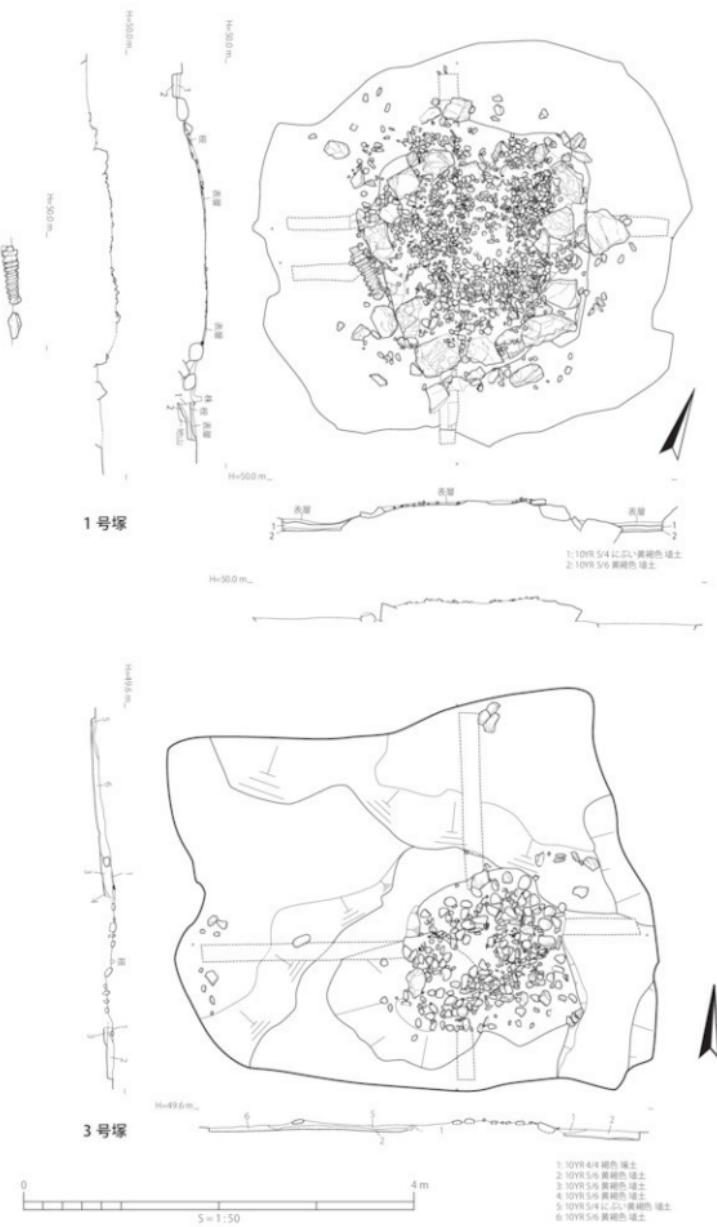


第23図 松谷寺跡 塚地区 平面図

塚は3基確認したが、2号塚については、礫の分布は疎らで盛り上がりは確認できず、かろうじて略方形プランの内部に礫が散在しているのみで、保存状態が非常に悪い。

1号塚は、崩れているものの大きな角礫を方形に組んで囲んでいることは看取でき、内部に円礫を敷き詰めるように充填している。あまり明瞭ではないが、塚の盛り上がりを強調するように、大きな角礫の周囲を開むように掘り凹めてあり、これがプランとして見いだされる。西面の傍らには、上部から転落したと見られる相輪（第＊図1）が出土した。

3号塚は、円礫の集中は確認できるが、塚の盛り上がり、周囲を開む角礫や周溝などは不明である。



第24図 松谷庵寺跡 遺構実測図

## 2 遺物（第 25 図）

今回調査で出土した遺物は僅かで、なおかつそのほとんどが細片であったために、実測図化して報告するのは 3 点である。

1 は相輪である。簡略化した作りで、宝珠と九輪のみで構成されている。あるいは、九輪の 8 段目は請花のようにも見える形をしている。1 号塚には他に石塔を構成したと思われる石造物は確認されていない。石材は、やや緑色を帯びた凝灰角礫岩である。

2 は須恵器、平瓶である。前回報告の再掲（市内遺跡報告 VI 65 頁 第 35 図 8）であり、今回調査で接合資料や同一個体片の追加があったことから再実測したものである。

3 も須恵器、壺 A である。前回報告の同器種とよく似ており、8 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

4 は上師器、浅型椀である。糸切り底で器壁が非常にうすい。前回報告の同器種とよく似ており、10 ～ 11 世紀代の所産と考えられる。

その他、確認調査の出土遺物ではないが、調査地平坦面の登り口付近で 5 の磨製石斧が採集された。定角式の磨製石斧で、石材は蛇紋岩、基部を欠損している。基部が幅広の特徴から、縄文時代中期ごろの所産と思われる。

## 第 4 節 小結

本報告は、平成 18 ～ 21 年度に中宮八院「松谷寺跡」として調査した平坦面 A と B のうちの A の成果に基づいて、古代山林寺院「松谷庵寺跡」として平成 22 ～ 24 年度に実施した補足調査分の報告である。

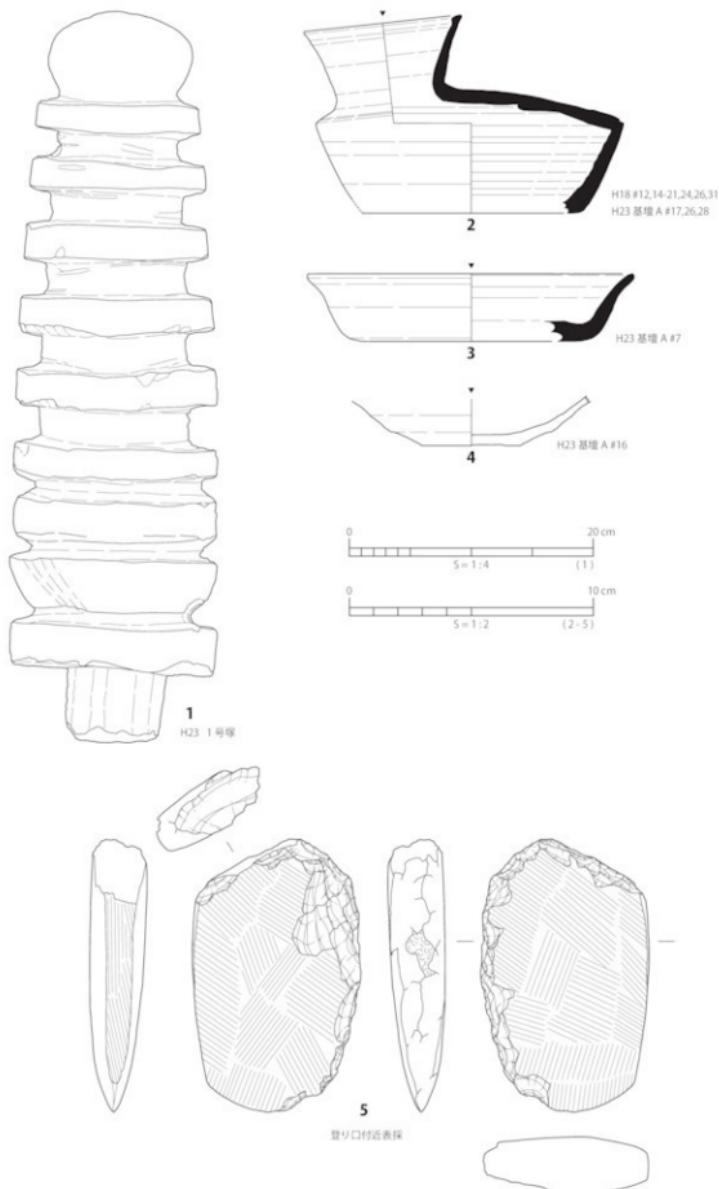
結果的には、当初の調査目的であった中宮八院の「松谷寺」の確認調査で奈良時代まで遡る古代山林寺院の遺構を発見し、これを「松谷庵寺」と呼び分けて追加調査をしたところ、「松谷寺」に関連する遺構を発見したことになる。これが 3 基の塚である。

これらの塚は内部にトレチを入れていないが、1 号塚は、傍らで出土した相輪によって仏塔としての性格が示唆される。3 号塚も同様に内部の調査をしていないが、現時点では経塚と推定している。2 号塚については、最終的に塚（状遺構）と認めるかどうかまで含めて再検討の余地を残している。

また、礎石建物については、今回調査で 5 間 × 4 間と確認され、中央に須弥壇を備えた仏堂と考えて差し支えない規模となつた。

### 参考文献

小松市教育委員会 2010 年『小松市内遺跡発掘調査報告書 VI』



第25図 松谷(廃)寺跡 出土遺物実測図

## 報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 13						
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII						
副書名	矢田新遺跡・五郎座貝塚・松谷廐寺跡						
巻次							
編・著者名	宮田 明・横幕 真						
編集機関	小松市埋蔵文化財センター						
所在地	〒 923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713						
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 30 日						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢田新	石川県小松市 矢田町	17203	03108	36° 20' 28"	136° 24' 38"	2013. 7. 9 ~ 2013. 7.26	63	個人住宅
				36° 20' 28"	136° 24' 38"	2013.10.17 ~ 2013.10.30	65	個人住宅
五郎座	石川県小松市 今江町	17203	03147	36° 22' 28"	136° 26' 49"	2013. 5.23 ~ 2013. 6.13	58	個人住宅
				36° 22' 30"	136° 30' 34"	2010. 5. 8 ~ 2010. 7. 5 2011. 8. 3 ~ 2011.11.28 2012. 7.23 ~ 2012.10.11	約 4,000	重要遺跡 詳細分布調査
松谷廐寺	石川県小松市 五国寺町	17203	03283					

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田新	集落跡	古代	掘立柱建物 2 棟 溝 4 土坑 7 不明遺構 3	土師器、須恵器、鍛冶滓、鉄製品	
要 約	掘立柱建物 2 棟と複数の溝・土坑を確認。土坑には硬化面や焼土が伴い、竪穴建物の掘り方土坑の可能性がある。				

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五郎座	集落跡	縄文 弥生 古墳 中世	土坑 2	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、鍛冶滓	

要 約	土坑の掘削は古代以降か。調査範囲に貝塚はなかった。				
-----	---------------------------	--	--	--	--

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松谷廐寺	寺院跡	古中世	礎石建物跡 1 塚 3	須恵器、土師器	縄文時代の 磨製石斧採集
要 約	礎石建物跡は、前回調査より東側に 3 間延長することが確認され、5 間 × 4 間の仏堂跡と考えられる。新たに発見された塚 3 基は、中宮八院「松谷寺」関連遺構と考えられる。				



I区 東側完掘（南から）



I区 北側完掘（西から）



II区 東側完掘（南から）



II区 北側完掘（西から）



SB08 完掘（北から）



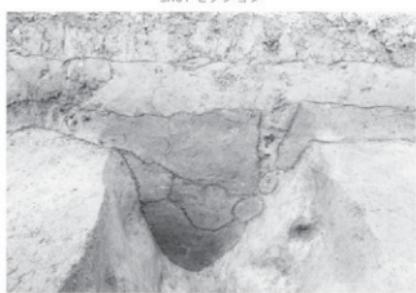
SB09 完掘（南から）



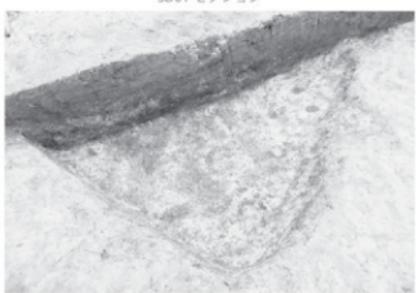
SX01 セクション



SD01 セクション



SD02 セクション



SK01 セクション



SK02 セクション



SK03 完掘



SK03 内掘削 (焼土遺構棱出面)



SK03 内焼土遺構セクション



SK04 セクション



SK05 セクション



SK06・07 セクション



SK06・07 硬化面検出

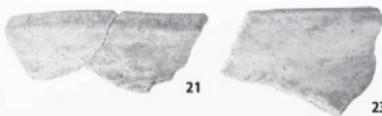


1



2

3



21

23



26



30

28

29



25

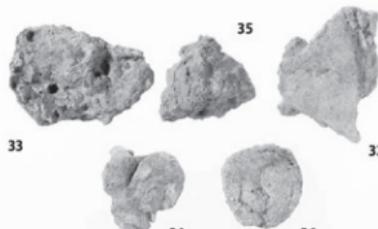
20



7

8

18



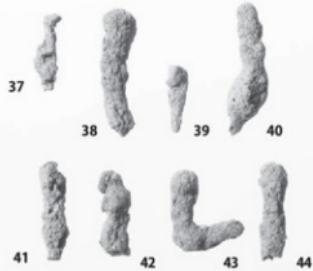
33

35

32

34

36



37

38

39

40

41

42

43

44



作業状況 (SK01)



作業状況 (SK02)



プラン確認 (SK01)



プラン確認 (SK02)



セクション (SK01)



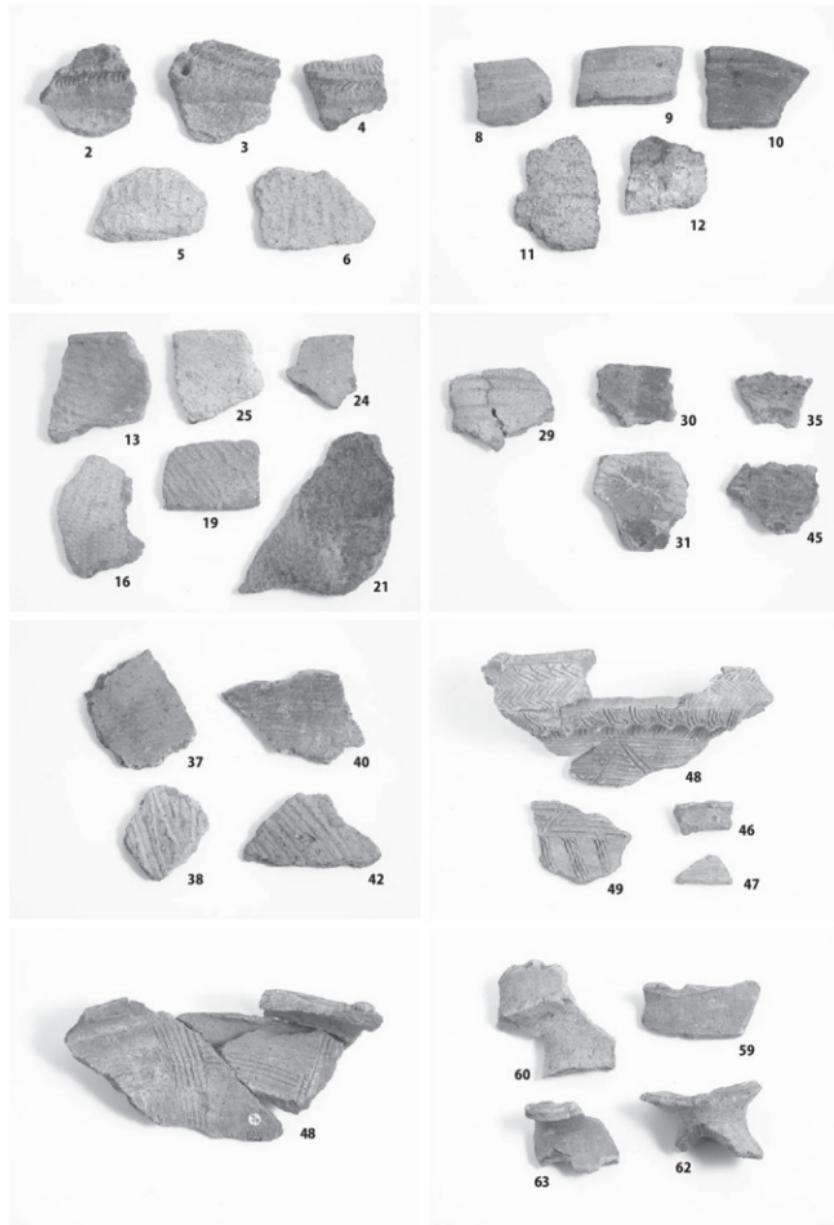
セクション (SK02)

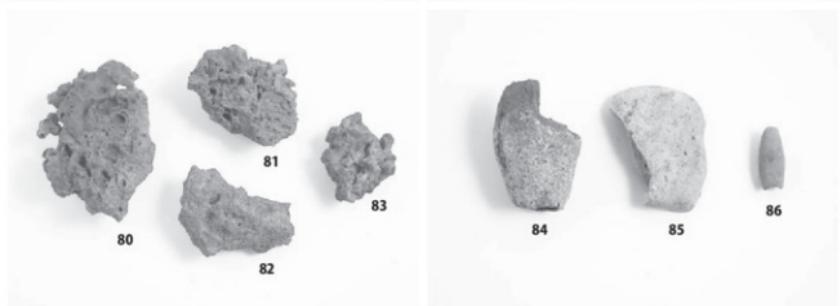
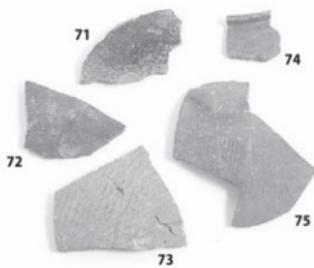
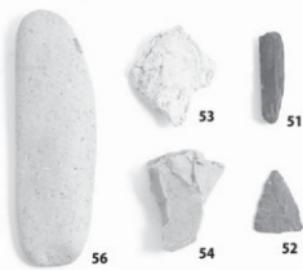
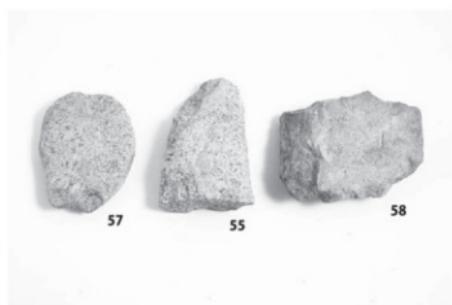


セクション(西壁)



完掘状況







基礎建物(A)



1号塚



2号塚



3号塚



2



3

4



1



5

---

---

## 小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII

矢田新遺跡・五郎座貝塚・松谷庵寺跡

平成 30 年 3 月 30 日 発行

編集・発行	小松市埋蔵文化財センター	
	石川県小松市原町ト 77-8	TEL (0761) 47-5713
印 刷	株式会社ゲンダ美術印刷	
	石川県小松市丸の内町 2-32	TEL (0761) 22-7031

---